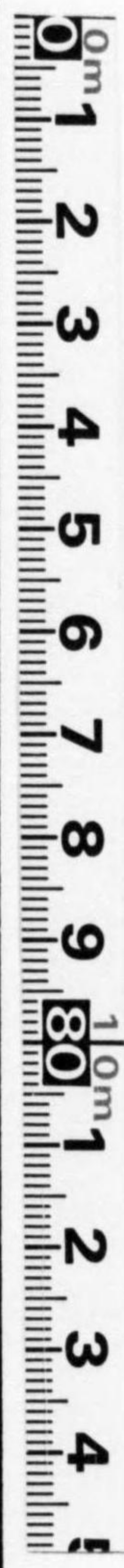


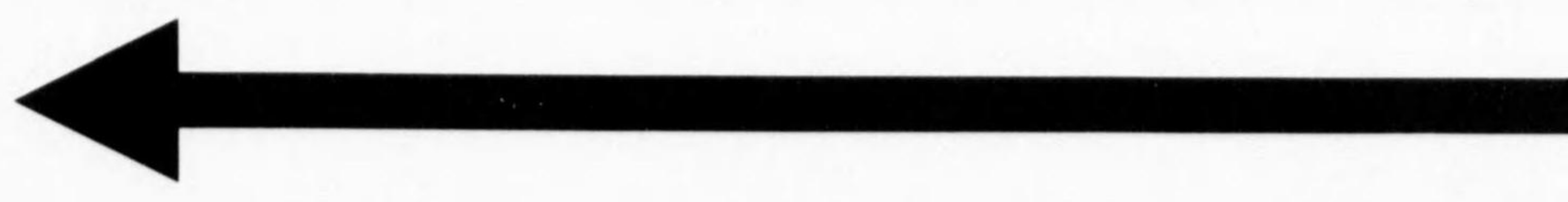
64-243



4
13



始





五卿滯在記錄



五卿滞在記録

例言

一本書ニハ福岡藩主黒田家ノ五卿滞在日記ト福岡藩土
 上野右内ノ五卿方御受取御用金銭出入帳トヲ收メ私
 ニ題シテ五卿滞在記録ト云ヘリ

一五卿滞在日記ハ其内容ヲ按ズルニ福岡藩管内太宰府
 ニ滞在セル三條西季知三條實美等五卿警衛ニ關スル
 慶應元年四月以降慶應三年十一月ニ至ル藩廳記録ヲ
 抄録編次シタルモノノ如ク編輯ノ態未タ盡サザルモ
 略完キニ近シ從來五卿宰府滞留中ノ史料ハ流布セル

例言

一



書鈔カラザレドモ警衛者側ノ記録ニ至リテハ刊行頗ル尠シトナス本書ハ此點ヨリシテ例ヘ一藩ニ偏スルノ嫌アルモ頗ル貴重ノモノト信ズ今頭書ヲ追記シ其ノ目次ヲ卷首ニ載セテ茲ニ收ム

一 上野右内ノ五卿方御受取御用金銭出入帳ハ筆ヲ元治元年十二月ニ起シ慶應元年五月ニ盡セリ單ニ金銭出納ノ額面トソノ目トヲ記シタルモノナレドモ經濟史的研究ノ資料トシテ茲ニ収録セリ

一 尙本書出版ニ關シテ黒田侯爵家并ニ上野瑞彦氏ノ好意ヲ深謝ス

昭和二年六月

日本史籍協會

五卿滞在日記

五卿滞在日記目次

- 慶應元年四月三日黒田家ヨリ被進品々ノコト
- 同年六月三日黒田家ヨリ被進品々ノコト
- 同年三月火災ノ際五卿立退場所ノコト
- 同年六月朔日五卿使者來福一件
- 被進品ノコト
- 同年七月十三日齋藤藏人出宰ノ件
- 同年九月十八日黒田家ヨリ被進品ノコト
- 四藩談合
- 慶應二年五月廿六日五卿ノ馬療治ノコト
- 同年七月十日中元贈物ノコト

目次

同年十二月十九日被進品	二五
慶應三年七月被進品	二七
同年十一月十五日被進品ノコト	二九
慶應二年十二月五卿歸洛ノ件五藩應接方ヨリ歎願ノ一件	三二—三六
慶應三年十二月三條實美等歸洛復位一件書類	三七—三五
福岡藩世子黒田長知箱崎茶屋ニテ三條實美等ト出會一件	五六—六四
五卿歸洛ニ付護送手續一件	六四—七六
同年三月三條實美ト秋月藩主黒田長元トノ音信手續一件	七六
主上崩御五卿謹慎ニ付慶應三年二月黒田家ヨリ被進品ノコト	七九
慶應元年十一月齋藤藏人含書太宰府ニ立寄人取締ノ件	八〇
慶應二年正月熊澤助左衛門報告	八三
關門取建一件	八四
鶴原九平等上申書	八八

五卿附隨者行動取締	八九
盜賊改方小林頼母手先宰府探索一件	九一—九六
同年二月力藏一件	九七
同年正月廿六日宰府搜索一件	一〇〇
同年六月十六日易者長門一件	一〇一
吉兵衛一件	一〇二—一〇八
同年八月四日痛馬ノ件	一〇九
三條西卿武藏温泉ニ入湯一件	一一〇—一一五
原某前田某召捕一件	一一五
於宰府某被殺傷一件	一一六—一二六
四條卿轉宿一件	一二六
小河伊兵衛探索書	一二七
大山格之助古閑富次書狀	一二九

三條卿武藏湯治ノ件三好九内ヨリノ伺書	一三二
東久世卿病氣ノ件熊澤助左衛門上申書一件	一三三
同年九月小者頭等亂暴一件熊澤助左衛門上申書	一三五
於内山筒火通等熊澤助左衛門上申書	一三七
四人衆寶満山登山ノ件	一三九
東久世卿病氣ノ件等	一四〇
小者力藏等ノ件	一四二
同年十月十七日長州人飯塚宿へ到着一件	一四四
慶應三年三月朔日長州ヨリ使者出向ノ件	一四八
同年五月八日長州ヨリ使者出向ノ件	一四九
同年十月五卿ト長州使者トノ往復ノ件ニツキテ諸藩交渉顛末	一五二—一五六
同年正月十日松囃子一件	一五六
同年四月四日薩州ヨリ挨拶一件	一五六

五人衆并家來無斷遠乗ノ件	一五七
同年五月五卿衆遠乗ノ件等	一五九
同年六月十五日土州人歸國一件	一六〇
印鑑變更ノ件	一六二
薩州入費取換ノ件	一六三
五人衆鐵砲打ノ件	一六三
同年七月清水要助ニ注意ノ件	一六五
三條卿遠馬ノ件	一六六
同年八月吉田清右衛門死去一件	一六六
五人衆持馬ノ一件	一六六
同年九月四日三島榮之助出奔一件	一六九
渡邊左衛門等鐵砲注文一件	一六九
同年十月八日薩藩士等密會ノ件	一七〇

同年九月—十月二日松崎精平風說書 一七二
 同年十月條公不快ニ付武谷椋亭差遣ノ件 一七三
 五卿等無斷犯制一件 一七五
 同年十一月米藩士茶進上ノ件 一七七
 力藏死去一件 一七八
 同年十二月薩長へ密勅一件 一七九
 慶應元年十一月延壽王院願書五卿宿泊所ノ件 一八一
 同年二月馬廻頭無足頭伺書 一八三
 四藩和親ノ件條々 一八四
 力藏取締ノ件 一八七
 同年九月池内清大夫上申書宰府表警衛ノ件 一八九
 同年七月宰府ニ於ケル五卿方取扱振伺書并指令 一九一
 齋藤奎番除ノ件 一九五

材才右衛門心得方ノ件伺 一九五
 三條家々來博多ニテ劔類ヲ求ム 一九七
 宰府ニテ相撲ノ件 一九八
 五卿衆商人ト相對買ノ件 一九九
 郡方付出役省略ノ件 二〇一
 同年八月五卿内探索方 二〇二
 四藩振合ノ事并警衛方等伺書 二〇二
 守衛引切受持姓名 二〇五
 同年九月佐々木參吾田村豊前妻宰府ニ來ル件 二〇七
 同年十月守衛引切受持姓名 二〇九
 五卿方ノ馬ニ就テ 二一〇
 宰府守衛人 二一一
 四藩詰士取締一件 二一二

同年十一月宰府異變之節手配廉々 二一四—二一九

五卿附士應接ノ定 二一九

守衛受持者姓名 二二〇

同年十二月守衛引切受持名許 二二一

大山彦太郎暇願ノ件 二二一

浦之坊ヨリ宿所ノ件上申 二二三

慶應二年正月田中秀哉糺明ノ件 二二四

守衛受持人名 二二五

同年二月馬醫船越元信出入ノ件 二二五

繪師鶴柄出入ノ件 二二六

應接方増人數ノ件 二二七

守衛人交代ノ件 二二七

五人衆五藩へ分離ノ件 二二九

宰府詰薩入矢留場設置ノ件 二三二

同年三月五卿謹慎方并警衛方ニツキ應答案 二三二—二三八

守衛増人數ノ件 二三九

同年四月守衛方臨機處分ノ例 二四一

守衛増人數ノ件 二四二

三好九内宰府受持辭退願 二四三

非常心得方 二四三—二五二

藝州へ中村徳藏差遣ノコト 二五二

宰府守衛受持人名 二五二

宰府急變ノ際注進仕法 二五三

同年五月守衛人名 二五五

守衛人數増減ニ付テ評議箇條并指令 二五五

順勳丸繫留ノ件 二五八

同年六月秋月人數姓名問答ノ件

同年七月塚本道甫出張ノ件

宰府附近福岡藩士ノ大警衛部署

宰府守衛引切受持

宰府詰筆役料ノコト

宰府近邊番所取建一件

宰府へ出張ノ秋月藩士給與ノ件伺書并指令

同年八月林才右衛門挨拶ノ件

宰府番所取建更ニ嚴重取締ヲナス

竹中彦太夫馬廻頭ト爲ル

同年九月藤井九左衛門進退伺

宰府表警衛ヲ一層嚴重トナス條々

同年十月宰府守衛人名

二六〇

二六〇

二六〇—二六五

二六五

二六五

二六七—二七六

二七七

二七九

二八〇

二八二

二八四

二八五

二九〇

宮内十郎右衛門進退伺

守衛引切受持人名

同年十二月宰府引切受持人名

慶應三年正月宰府引切受持人名

同年三月五卿衆歸洛一件

同年六月宰府守衛引切受持人名

同年七月同上

同年六月宮本權八應接役御免

同年八月五卿歸洛延期ニ付無足頭伺書

宰府守衛者姓名

警衛者役扶持ノ件

同年十一月警衛役伺ニツキテ大頭ヨリノ伺書

二九一

二九二

二九三

二九四

二九五—三〇八

三〇八

三〇八

三〇九

三〇九

三一〇

三一三

三一四

五卿滞在日記



慶應元年四月三日
黒田家ヨリ被進
品々ノコト

元治二年四月三日

一矢野相模御家老五卿御見廻として宰府に罷越候ニ付左之通被遣被下有

干菓子

一箱

糍漬鯛

一桶

右三條殿

越路

一箱

糍漬鮑

一桶

右三條西殿

羊羹

右同

五卿滞在日記

五卿滞在日記

味噌漬鱈

右同

右東久世殿

かすていら

右同

粕漬あみ魚

右壬生殿

つまみ羊羹

味噌漬鱈

右四條殿

金子三百疋充

森寺大和守

三宅左近

太田司馬



金子二百疋充

藤岡彦次郎
水野溪雲齋
安井千代國
渡邊左門
長村縫殿
小西直記

戸田雅樂
杉本拙藏
山岡榮之進
武部諫尾
小藤又兵衛
盛岡延太郎

五卿滞在日記

谷 晋
 島村左傳二
 安藝盛衛
 上杉鐵三郎
 山本忠亮
 大山彦太郎
 平川和太郎
 木村琢磨
 鏡五助
 幡島三郎
 芳木春太郎
 櫛田速雄
 宮原主税

伊藤忠雄
 今井左司馬
 藤田主水
 田村豊前
 三浦主税
 丸尾文興
 乾久馬太郎
 高橋久之輔
 長谷川與吉
 荻野元吉
 奥田幸吉
 五

坂本禎次郎

三兩

馬捕小者

貳拾五人

○

六月三日

一五卿衆の御見廻として左之通被進之附添之面々にも被下有之

○七月十三日齋藤藏人被差越候節出生等取調子候付朱書いたし候

慶應元年六月三日黒田家ヨリ被進品々ノコト
○原朱書ノ文字ニハハス

五卿衆の

鮑

壹籠

附添之面々の左之通被下之

博多素麵

壹箱貳百把入

(諸大夫)

(三條)

寺大和守

(三條)

宅左近

(三條)

大田司馬

(久留米)

(三條)

水野溪雲齋

(土州)

(三條)

南大一郎

(水戸)

藤岡彦次郎

(西三條)

井千代國

(東久世)

渡邊左衛門

(壬生)

長村縫殿

(四條)

小西直記

博多素麵

(三條) 戸田 雅樂

(三條) 山岡 榮之進

(三條) 上杉 鐵三郎

(三條) 盛岡 延太郎

(三條) 安藝 盛衛

(三條) 杉本 拙藏

(三條) 島村 左傳次

(三條) 山本 忠亮

(三條) 武部 諫尾

(三條) 小藤 又兵衛

(三條) 芳木 春太郎

(東久世) 伊藤 忠雄
(本名淵上謙三)

(久留米)

(同)

(同)

(同)

(王州)

(同)

(同)

(王州)

二箱五百把入

(三條) 鏡田 五助

(王生) 藤田 主水
(本名牧外記)

(三條) 平川 和太郎

(四條) 三浦 主税

(三條) 木村 琢磨

(三條) 谷村 琢磨

(西三條) 宮原 主税

(東久世) 今井 左司馬

(三條) 幡島 三郎

(四條) 安並 直樹
(本名井上彈正改丸)

(三條) 田村 豊前

(三條) 櫛田 速男

(膳所)

(久留米)

(同)

(王州)

(王州)

(久留米)

(三條) 醫師

丸茂 文興

博多素麵

(小者頭)

(三條) 乾久馬 太郎

(小頭)

(王生) 坂本 禎次郎

(東久世) 萩本 元七

並素麵

(御厩)

(三條) 安田 繁藏

(前二同)

小谷 三吉

(前二同)

(西三條) 安部 助之進

(小頭)

(王生) 木村 喜助

(小頭)

(王生) 早川 巳之吉

(前二同)

(王生) 福賴 三代吉

(小頭)

(王生) 大谷 榮藏

(王州)

(三條) 山彦 太郎
(本名石川)

一箱百把入

(小者頭)

(三條) 高橋 久之助

(小頭)

(西三條) 長谷川 與吉

(小頭)

(王生) 奥田 孝吉

貳拾五把

(上二同)

(東久世) 杉山 清吉

(上二同)

(東久世) 中村 竹次郎

(上二同)

(東久世) 高津 定吉

(上二同)

大澤 虎吉

(上二同)

上野 直次郎

(小頭)

田中 吉兵衛

五卿滞在日記

右同

貳拾五把

下部拾五人

十

慶應元年三月
火災ノ際
五卿立退場
所ノコト

丑三月

△三條初火災之節立退場左之通尤風筋ニよつてハ遠方立退不相成候所々
手當有之

二日市御茶屋

よし木村

宰府ニあるハ

光明寺

○ 満盛院

○

慶應元年六月
朔日五卿
使者來福一
件

六月朔日

一五卿衆宰府之御使者中島二口屋に到着

三條殿諸大夫

森寺大和守

上下四人

町奉行

町奉行

衣非安六郎

御使番

山口孫右衛門

同

小川専左衛門

一於會所今日左之通及出會

旅宿見込

御口上取次

御馳走役

五卿滞在日記

十一

會所奉行

富田孫作

御口上

嚴暑之節御座候處愈御安泰被成御座珍重之御儀ニ被存候扱(原朱書)春來は不
嚴暑之節御座候得共彌御安泰珍重御事被存候春以來之爲御挨拶委曲

容易御厄介ニ被相成殊ニ毎々御恂情ニ被仰遣不淺忝被存候此節乍延引

御口上之趣被仰越被入御念儀忝次第被存候

右御挨拶以使被申入候事

御進物

御兩殿様に

御狩衣地

一卷

御扇子

一箱

充

○右御使者に時刻次第御湯錢被下之

○播磨御家老中に御口上有之候得は會所奉行承次第ニ候得共其儀
無之

六月二日

一今日御返答被仰出候付於會所左之通及出會

町奉行

衣非安六郎

御小生頭

田代半七

御返言

御納戸頭

河村主鈴

挨拶

御使番

山口孫右衛門

御馳走役
相伴共

會所奉行

御料理

二汁五菜

御使者に左之通被下之

銀子

二枚

右御目録銀子共會所奉行より相達之

御進物才料に

金子五十疋被下之

○

被進品ノコ

一五卿衆に爲御見廻左之通被遣候付御内中を初四藩御守衛之面々にも被下有之

本文被遣物は上野右内書役所宰府出役中御用有之致出福罷歸候付同人受持每事取計候事

一耕魚 十五本

一折

一御酒

貳挺

一燒鯛 はり切鯛 小鯛ニ多

百八拾枚

三條殿

御内中に

四卿衆

士分々下部迄凡七十人許

一御酒

四斗

一燒鯛 はり切鯛 小鯛ニ多

百五拾枚

薩州様

士分々下部迄凡六十人許

一 御酒
一 燒鯛 右同

貳斗
三十枚

一 右同

肥 後様

士分六人上下拾貳人

肥 前様

士分貳人足輕体共凡十三四人許

一 右同

久留米様

士分々下部迄凡二十人許

合ふ

惣人数百十人許

○

慶應元年七月十三日齋
藤藏人出宰ノ件

慶應元乙丑年七月十三日

一 齋藤藏人所詰 五卿御見廻御使者として宰府に罷越候付左之通被遣被

下有之

御口上振

久々御無音時候御見廻旁被指越候事

演説振

國許之儀ニ付先達は色々御厚配之段致承知別々忝被存候多人數
慎被申付儀ニは候得とも全身分儀ニ付不審之次第有之當時慎申付
事ニ御座候右之通之儀ニ付聊御心配無御座様被存候事

干 鱈 七十

一箱 充

御菓子 七斤入

一箱

五卿衆に

右目錄ニ不及

金子二百疋充

森寺大和守初

十人

金子百疋充

戸田雅樂初

廿五人

金子三百疋ヲ

乾久馬太郎初

六人

金子七百疋ヲ

馬捕小者

貳十五人

一右同斷ニ付藏人々自分勤左之通御仕渡有之

葛粉 五升入

一笥充

五卿衆

目錄ニ不及

一同斷ニ付御右筆二人付添ニ被指越候事

○

九月十八日

△藤井九左衛門無足頭宰府に御用有之被差越候付五卿初に左之通被下有

之

覺

雁

三羽

鳴

二羽

五卿方

五卿滞在日記

慶應元年九月十八日黒田家ヨリ被進品ノコト

御酒

三斗

肴

一折

交小肴
五十

五卿方御内侍分三十五人

酒肴料金三兩ハ

下輩三拾四人

御酒

三斗

肴

一折

交小肴
七十

薩州様六十人計

御酒

一斗

肴

一折

交小肴
十五

肥後様十二人

右同斷

肥前様十二三人

右同斷

久留米様二十人計

四藩談合

四藩之面々咄合同意ニ落合候上實美家來森寺大和守ハ四藩一同申入之大意◎校訂者曰本文中、、ヲ附シタルハ原書抹削セルモノナリ

(原朱書)
兼不佐々木三吾義豊後別府ハ被罷越居候處病氣不相勝候付田代轟間ハ罷先達不藤岡彦次郎秋本速水豊後別府表ハ佐々木三吾病氣不相勝候付對面越候段申來候由右ニ付先達不藤岡彦次郎秋元速水儀指限り存生中致對面と相偽同所ハ罷越直ニ田代之方ハ罷越候末以後之處屹度御取締可相度次第有之右兩所間被罷越度趣申入ニ相成人情無餘義次第依義藤井九左成旨實美様ハ厚御挨拶も御座候ニ付此節ハ藤井九左衛門限ニ相濟可申衛門限り承置候其末三吾ハ此元被罷歸未タ右兩人歸著無之ニ付依疑念

慶應二年五月二十六日
五卿ノ馬療治ノコト

五月廿六日

一杉原平兵衛御馬醫ノ五人衆痛馬爲療養罷越服藥等爲致候付左之通被相贈候段罷歸申出之

金子五百疋

慶應二年七月十日
贈物ノコト

△三條はしめノ中元ニ付御馬方ノ左之通贈物有之候旨御小生頭ノ申出之

袴地

一反

金

千疋

林才右衛門

金

三百疋

杉原平兵衛

慶應二年十二月十九日
被進品

慶應二年十二月十九日

一五人衆初ノ爲御見廻左之通被遣之

鴈

三羽

鴨

二羽

右五人衆ノ

酒

三斗

肴

一折

大脚壹尾鯛二枚
鮓七

右隨從

四拾貳人

酒肴料金貳兩

右同小者

二拾貳人

酒

貳斗

大御壹尾鯛壹枚
鮎七

右薩州様

三拾四人

酒

三斗

一折 右同

右肥後様

四拾貳人

酒

貳斗

一折 右同

右佐嘉様

三拾四人

酒

貳斗

肴

一折 右同

右久留米様

三拾四人

慶應三年七月被進品

慶應三年七月

一五人衆は暑中爲御見廻左之通被遣候付御内中を初四藩御守衛之面々も被下有之

本文被遺物は寺田嘉兵衛御用有之出福いたし居此節罷歸候付同人受持每事取計候事

鮮魚 五尾

一折

五人衆

酒

三斗

集肴

すし、き焼魚六ツ
焼鯛三十焼こち十

右
隨從中
酒肴料金貳兩

右
小者廿二人

酒 壹斗
燒鯛 廿五尾

薩州様
拾四人

右同

肥後様
拾四人

酒 五升

燒鯛 十五尾

肥前様

六人
小使二人

酒 三升
燒鯛 十尾

久留米様

五人

○

慶應三年十一月十五日

一五人衆初の不時爲御見廻左之通被遣被下有之候付寺田嘉兵衛出福いた

し罷歸候付同人に委細御用人に申談達方取計之

但不時被下ハ無之候得共近來ニハ薩藩之取計方ニ隨從はしめ不服

五卿滞在日記

二十九

慶應三年十一月十五日
被進品ノコ

いたし専水野溪雲齋等々ハ何となく 此方様の御したひ申上居候處
 此程薩藩ニあるも是迄之仕損償ひ旁内々仕向筋等も有之哉ニ相聞候此
 折柄ニ候得ハ彌以隨從はしめ御引付置相成居候ハ、先々御辨利も可
 宜との評議ニ表向ハ此度速ニ發登ニも可相成折柄遅々ニ相至何廉
 御不自由ニ可有之と御察被成候付御打せ之鳥爲御慰御酒御添御送進
 被成候段取繕嘉兵衛申達被遣取計森寺初にも同様之趣を以被下取
 計候處ニ如本文

真鶴

二羽

御酒

壹樽 壹斗入

右五人衆ハ

黒鶴

壹羽

酒

壹樽 五斗入

右

森 寺
 水 野
 南

鴨

一羽

酒

二升

○諫尾ハ是迄隨從總人數之内ニ加へ被下有之候ハ共今程
 同人ハ寡口利ニ多用達いたし居候付申出ニよつて如本文

武 部 諫 尾

鴨

六羽

酒

貳斗

隨從 三十人餘

酒肴料金貳兩

小者 十七人計

慶應二年十月五日
洛ノ件ノ御歸藩
應接方ヨリ
歎願ノ一件

一元三條はしめ歸京之儀五藩應接方一同上京之上御手筋及御引合候之處
書取を以願出候様御差圖有之候付左之書取相認五藩一同板倉伊賀守様
御老中ノ罷出差出候處御受取相成候段京都より十二月十六日之便及言
上

右一條薩肥より御手筋内話之末御格老迄書取を以願出候様差圖有之
候ニ付薩藩より草稿いたし候上五藩打寄評議之上如本文

五藩より差出候書取

去春以來筑前太宰府ノ謫居相成居候五卿方は迄五藩ノ警衛被

仰付候付一向動靜相伺居候處至極謹慎之次第御座候從來之處少々之
意味違ふ

闕下を離れ罪を犯され候得共全違背之心底ニ有は無之譯ニ有最早兩

年之遠謫何も違變之事も無之而已ならず於長州も解兵迄も被
仰出候付有は何卒寛典之御所置を以歸洛之處御宥免相成候様兼有警
護之事故歎願仕候様各藩主人共熟評之上私共奉願候様被申付候付
此段奉願候以上

有馬中務大輔内

梶村俊八

松平肥前守内

愛野忠四郎

御名内

森三右衛門

細川越中守内

秋吉久左衛門

松平修理大夫内

大山格之助

一右ニ付正月廿三日板倉様より御呼出に付御留守居罷出候處兼御預被置候三條實美初此度願之趣も有之候付御預御免當地に御引取可相成候付途中警衛人數差添穩便ニ相送候様尤附屬之者共大坂著之節御目付に相届候様との趣各藩連名之御書付以御用人御渡相成候段同廿九日之便京都を及言上但細川様御初には

此方様より御通達相成候様との趣も御用人を以被仰聞之

○本文御達之趣御留守居より各藩類役迄御書付寫差廻森三右衛門并各藩にも御書付致披見候様且一体之手續等も取計重疊申合候様三右衛門に申談置候處御達書之内各藩存寄之處有之薩藩に御目付に引合中ニ付運次第三右衛門各藩一同出立之筈之旨をも及言上

御書付寫

折返し

松平美濃守

細川越中守

有馬中務大輔に

松平修理大夫

松平肥前守

兼御預被指置候三條實美始此度願之趣茂有之候付御預御免當地に御引取可相成候間得其意右之趣其方共より相達候様可被致候尤途中警衛人數差添穩便ニ相送候様可被致候但附屬之者共は大坂著之節同所御目付に相届可得差圖旨附屬之者共は可被達候

一右御達之趣

宰相様御承知之上爲御請伊賀守様に御留守居御使者を以被仰達候付

取計候様三月十五日之便御下知申入之

慶應三年三月十日
二月三日
美等歸洛復
位一件書類

三條殿初此節入洛復位被 仰出候付歸京之事

慶應三年十二月

一三條殿初先年以一族義絶被

仰出居候處今度被止其儀入洛復位被 仰出候由ニ左之通御達有之候
段薩州藩大山彌助西郷新吾大早ニ於十二月十四日宰府表ニ著三條殿は
しめ申達候旨申越候段小河勘左衛門宰府詰應接方歸福之上申出之

右ニ付乗船之儀は

此方様薩州様蒸氣船一艘充差出之

御沙汰書寫

三條實美

先年以一族可儀絶被

仰出候處今度被止其儀入洛復位被 仰出候事

於官者可稱前官尤入洛之上關官節可被復候事

一右之趣御承知被遊候付爲御怡應接方以御使者左之通被遣之

御肴 一折

御口上

寒氣之節彌御安泰珍重御事候此節御入洛御復位被爲蒙

仰候由承知仕目出度奉存候

右爲御怡目錄之通致進覽之候

一三條殿初歸京ニ付爲御怡應接方以御使者左之通被遣之

右ハ當春歸京ニ付其砌不取敢御怡として御肴一折御樽一荷充

御兩殿様より以御使者被遣且隨從中にも酒肴被下相濟居候處追々

延引相成此度發登之儀差起候付るは一向御取扱無之候も御不都

合ニ可有之与申合然ニ細川家ニ而ハ三條家の御由緒も有之金子三百兩出立ニ付内々御贈物有之候趣追々相達水野溪雲齋も寺田嘉兵衛の右等之趣内密申聞候趣も有之候付重疊評議之上此節彼是を以如本文

五人衆の

金子 三百兩

博多織帶地 十筋

但白地白受ケ

一右出立ニ付五藩申合之上左之通支度料として被遣之

右ハ當春可被遣之處追々及延引此節如本文

五人衆の

金子 五百兩

右ハ應接方々達方々取計

一右ニ付隨從中にも仕廻金として左之通被下之
但四藩よりも同様被下相成候付如本文

金子

三百兩

右達方應接方取計

一右ニ付左之面々ハ以別儀左之通被下之

博多織帶地

一筋充

森寺大和守

水野溪雲齋

南 大一郎

武部 諫尾

一三條殿初の御家老中御怡旁左之通進物有之

鯉節

一箱 充

間奉書壹束入

一箱

一同斷ニ付宰府詰無足頭より自分進物左之通相贈之

五人衆

素麵

七十把

沖切鯛

五枚

一三條殿はしめ宰府出立箱崎を乗船歸京ニ付右道筋掃除并見物無作法無
之様筋々の可相達旨御用人より左之通大目付に相達之

大目付

三條殿はしめ此節於京師入洛復位被 仰付候由ニ明後十九日宰
府出立箱崎一泊ニ同所より蒸氣船に乘船歸京之事ニ候右道筋掃
除等申付見物不作法之儀無之様筋々の相達置可被申候事

一同斷ニ付箱崎迄之休泊并途中先拂等差出之

隨從はしめ各藩護送共小休所手當并箱崎ハ堅粕村より松原通通
行之儀も取計之

途中先拂

側筒貳人

小休

雜餉隈

比惠村新屋邊野立

泊

箱崎御茶屋

一右ニ付小休所ニ有左之通差出之

茶菓子

一同斷ニ付遠見左之通差出置之

一番 堅粕村

二番 箱崎松原中程

三番 馬出入込

四番 箱崎著

一右ニ付隨從中には箱崎御茶屋近邊宿手御手當有之

各藩護送之向ハ博多止宿尤各藩應接方には箱崎止宿ニ付夫々宿手

御用意有之

一三條殿はしめ十二月十九日朝宰府出立箱崎御茶屋に同夕刻著有之候段

同所出役無足頭より申越之

右出立之節箱崎迄之護送は宰府詰方之向より付添有之

○五人衆には出立之節長棒駕籠并陸尺看板等御用開ニ有御手當之上

差廻之

一右ニ付箱崎著ニ付以御使者御見廻被仰遣之

御口上

彌御安泰珍重御事候今日宰府表御發足當所御止宿珍重奉存候依之

御見廻旁以使者申述候

五卿滞在日記

御使者應接方森 三右衛門

一同斷ニ付御茶屋滞留中三條殿はしめ隨從中は左之通御賄有之

隨從中には下宿々々又ハ御茶屋内ニ亦如本文

○自然風波之都合ニより乗船出來兼滞留相成候節は晚刻酒肴被指出
隨從中にも右同様被下之

著當日

見立旁

二汁五菜

隨從中は

一汁三菜

繪付

酒肴

著晝并翌日共

一汁三菜

隨從中は

一汁二菜

一右ニ付箱崎滞留中御茶屋近邊晝夜廻り方并假番所御仕構有之

但御茶屋御門御幕張臺挑灯等差出之

足輕頭壹人

組共

御茶屋御門前假番所番人

足輕貳人

一五人衆乘馬箱崎著之上御馬方は一式引付相成候付同所に左之通罷越

御馬方 林 才右衛門

口付共

一三條殿初宰府より箱崎迄之行列付

御守衛

御先乘

御先供小頭

四條殿御輿

壬生殿同

東久世殿同

三條西殿同

三條殿同

小頭壹人

森寺大和

南大一郎

水野溪雲齋

列奉行

御荷物

才料小頭壹人

各藩御守衛

御跡締方ハ役場ハ相勤御先番同斷

一 壹番拍子木

御供支度

一 貳番

御供揃

一 三番

御出門

一 五人衆并隨從中共通行ニ付人足御用渡各藩護送之向人足ハ賃錢拂ニ相成

一 右出立并著京之趣各藩申合 朝暮ハ御届之儀且著京之上御怡又は御見廻等ニハ御品被遣候儀其元之模様次第事々取計候様十二月廿日之便京都ニ御下知申入之

右立著之趣江戸表ハ御届之儀各藩之振合取調御届有之儀ニ候ハ直ニ江戸ハ申入方不都合無之取計候様申入之

○ 三條殿初入洛復位之儀ハ表立御承知可被遊候得共於其元ハ御達有之迭言上にも相成居可申一体ハ言上相達候上出立相成度儀申合候得共差向出立相起り是迄度々出立延引之末ニ付速ニ相運候方可然与評議之上取計右ニ付護送之内不足之所ハ京都詰之内呼向候筈ニ相成居候處此度

此方様ハ之護送ハ各藩よりは余程相増居候付別段増人数ニも及間敷其上此度歸路之振合ニハ最前之取調とも違ハ候付猶各藩振合承繕成丈護送之向呼迎等不相成候様取計方森三右衛門初ハ申談置候旨をも申入之其外委細之儀ハ右御用狀留ニ讓不記之

○ 右立著之趣且著坂之上御怡等被仰遣方各藩之模様取調御不都合無之取計候様大坂にも申入之

十二月廿二日

一林才右衛門御馬方は五人衆より左之通被下之

一乘馬

壹疋

但馬具掛なから

右三條西殿より

一馬具

貳脊

内鑑壹束不足

右壬生殿より

一金子

千疋

一同

千七百疋

右五卿衆より

一御菓子

壹箱

右壬生殿

より
四條殿

御内現人數名許

森寺大和

三宅左近

太田司馬

戸田雅樂

杉本拙藏

山岡榮之進

安井千代國

宮原主税

渡邊衛

伊藤忠雄

今井平三

長村縫殿

藤田主水

小西直記

田村豊前

三浦主税

右は箱崎御茶屋泊

五癩滞在日記

隨從現人數名許

五十

水野溪雲齋	南 大一郎
安藝盛衛	小藤又兵衛
盛岡辰太郎	島村左傳次
上杉鐵三郎	平川和太郎
谷 晋	深山鹿之助
鏡 五助	櫛田速男
志記芳太郎	丸茂文興
右は	

五人衆初出立當日持込荷物左之通

一五棹ハ

長持

小頭 六人
下部貳拾三人

一三拾四荷ハ

兩掛

但壹人持

一六荷ハ

笠籠

一五挺ハ

切棒 駕籠

一壹疋ハ

本馬

五人衆大廻荷物御代官に預ケ之品々左之通

三條西殿

一壹棹ハ

長持

三條殿

一同

同

一同

一三荷ハ

具足櫃

五癩滞在日記

五十一

同

一壹ツハ

駄荷

壬生殿

一壹棹ハ

長持

四條殿

一貳棹ハ

同

外ニ

壹荷ハ

藥籠

各藩應接方并護送名元

薩州

大山格之助

肥後應接方
秋吉又助

同
前田杏齋
古閑富次

同番士

渡邊理左衛門

兼友八郎助

関潤之助

池田佐左衛門

俗事掛
岡本善作

上下貳拾六人

肥前應接方

野田平兵衛

同番士

小山辰之助

副島重右衛門

大木清七郎

久留米應接方
上下拾九人

谷田彌一太

野村宗之丞

梶村俊八
飯田土五郎

淺田 万次郎

濱 田 喜 内

外ニ手附貳人

○

慶應三年十二月

一三條殿初最前宰府表に滯留之節より左之面々同所に入込賄向はしめ段
段出精相勤居候付此節歸京ニ付亦は相應手當可指遣之處何分其儀難出
來候付此方様より相應之御取扱被成下度旨三條殿隨從方應接方迄頼申
來候段申出候得共右類御取扱有之候得は外ニも右様之儀申出も可有之
候付御取扱無之方可然与申合候付程克及返答置候様御用人より相達之

福岡湊町

魚屋

平 次

宗像郡

赤間

新屋

忠 吉

同 郡

徳重村

傳 吾

同

手 子

福岡西町

魚屋

宇 兵 衛

慶應三年十月十日
世子黒田長藩
知箱茶屋長
ニテ三條實
美等ト出會
一件

少將様箱崎於御茶屋三條殿はしめの御出會之事
附り隨從中并各藩之内應接方の御目見被 仰付候事

十二月廿日

一少將様四ツ時御供揃ニ箱崎御茶屋に御出三條殿初に御出會被遊

御召服御繼肩衣襟高御袴被爲召之

御立宿座主坊に御地廻御行列ニ

御出同所ニ御待合被遊尤御出會之儀は前以應接方より申入之

一右ニ付左之面々御先ニ座主坊に罷越

御用人
格式頭取

奥頭取

一右ニ付三條殿初旅宿に

御出前以御使者御口上被仰遣

御兩殿様より左之通被遣之

御口上

彌御安泰珍重御事候此節御歸京として當所御止宿ニ付御見廻旁追

付以參可得貴意候仍目録之通致進覽候

宰相様之

御口上

彌御安泰珍重御事候此節御歸京として當所御止宿ニ付爲御見廻以

使者申述候仍目録之通致進覽之候

御目錄前

宰相様之

五卿滞在日記

博多織紙入地 三

同 多葉粉入地 三 一箱充

同 巾着地 三

味噌漬鯛 一箱充

少將様方

御菓子干菓子

一箱充

鶏卵

一箱充

外ニ

少將様方左之通被遣之

博多絞二反入

一箱充

右ハ應接方方相達之

御兩殿様御使者兼

御使者

御使番

一御出會被遊候付三條殿初ニ催合ニ而左之通被遣之

蒸菓子一箱

檜重酌 食一箱 一組

煮染一箱

應接方

御使者

一隨從中ノ左之通被下之

肴 一折

酒 三斗

一御出前旅宿ノ左之通罷越

奥頭取一人

御納戸一人
應接方

一御出御宜時刻應接方先方及引合御立宿に申上候上旅宿に御出被遊

御入之節御玄官に奥頭取應接方罷出

御刀奥頭取持之

御對話之間御次に相扣

一御入之節隨從之中御玄官に罷出候得は御會釋被遊

名披露

應接方

一右ニ付

少將様五人乘著座之上

御對座少し御下り

御著座相應御挨拶被遊

御入洛御復位被爲蒙 仰候御怡をも被仰述之

一右被爲濟

御披掛ケ御三ノ間

御著座左之面々に追々

御目見被 仰付被爲加

御意

御目見被 仰付候趣前以應接方先方に申入置之

御著座之上應接方連出之

初座

森寺大和守

名披露

應接方

水野溪雲齋
南 大一郎

二座

安井千代國
 長村縫殿
 小西直記
 渡邊左衛門

○森寺之外多人數ニ付名披露無之

一右被爲濟 御披露被遊候上各藩應接方ハ御居間三之間ニシテ

御目見被 仰付候付二ノ間ハ

御著座 御目見被 仰付

御意被爲加之

御目見被 仰付候趣前以應接方ハ先方ハ申入置

薩州

大山格之助
 前田杏齋

指支有之御斷申上候付

御目見等無之

肥後

秋吉又助
 古閑留次

肥前

野田平兵衛
 南里與助

久留米

谷田彌一太
 梶村俊八

右多人數ニ付名披露等無之

一右畢テ於同所水野溪雲齋ハ

御逢被遊 御手自左之通被下之

博多織襦高袴地

一右相濟、御立被遊

一右各藩應接方ハ於下宿左之通被下之

座主坊ニ被下差支ニ付如本文

御酒

御肴

右ハ應接方才判ニ取計之

○

一五卿衆よりは迄滞留之爲御挨拶同廿日御使者福岡表に被指越候旨箱崎
出役之熊澤助左衛門無足頭より申越候付於會所左之通相勤之

但右使者前以應接方申出居候付於箱崎成丈使者勤有之候様取計可
申段前日熊澤助左衛門に御用人より相含置候處此節ハ是非々々福岡
迄可被差立旨申掛ケ候付福岡ニ御請ニ相成不申ハ御不都合与申
合候段申越候上如本文

慶應三年十月五日
洛二付護歸
手續一件

五卿衆使者

太田司馬

一右ニ付於會所左之通及出會

御使番

御口上取次

天野武右衛門

同

相伴挨拶共

花房靜馬

御口上

甚寒之節彌御安泰珍重被存候一昨年來不輕御厄介被相成深忝被存
候此節應

御沙汰歸洛被致候因之御肴一折御酒一樽右御挨拶以御使被進候事

一右畢ニ左之通被下之

御繪付

湯漬

酒肴共

一右使者に左之通被下候付會所奉行より相達之

銀子

二枚

外ニ

金子

五十疋

進物才料

青銅

三百文充

持人□人

一右ニ付即刻會所おゐて天野武右衛門より御返言申達之

御返言

甚寒之節彌御安泰珍重御事候此節應

御沙汰御歸洛被成候付一昨年來之爲御挨拶委曲御使を以御口上之

趣被 仰越御目錄之通被懸御意被入御念儀忝奉存候

一三條殿初同廿一日箱崎を蒸氣船兩艘ニ乗組歸京相成候付

此方様が大鵬丸被指出壹艘ハ薩州様を被差出候付夫々乗組出船有之

但隨從并各藩護送之向共一同乗組尤五人衆はしめ隨從護送之内應接

方割合を薩州蒸氣船に乘組其外ハ

此方様御船ニ乗組相成

一右ニ付御茶屋下より乗船ニ付左之通差出之

但本船迄通船ニ被相越候付同所濱手ニ通ひ船差出之

○乗船場仕構等有之

通ひ船

早船 一艘

隨從通ひ船

丸頭船□艘

一右ニ付京都迄爲護送左之通罷越

五卿滞在日記

但大坂迄ハ京都詰方之内ハ爲迎被差越尤此元ハ之護送人數も一同付
添罷越

足輕頭

大岡仁太夫

足輕拾人

應接方

森 三右衛門

小河勘左衛門

重濱彌右衛門

長尾勝八

馬廻組

三好十右衛門

小野半藏

無足組

齋田一藏

爪田五三郎

末永喜平次

醫師

塚本道甫

右之外船中爲用辨左之通差越候

御用所書役

壹人

一右ニ付左之含書森三右衛門ハ御用人より相渡之

覺

一護送増人數京都詰合之内ハ大坂ハ差越候取しラヘニ候處一体爰
許方之護送人數各藩ハ余程相増候付別段増人數ニも及間敷哉其

五卿滞在日記

上此度歸路之振合ニハ最前之取しらへとも違ひ可申哉ニ付尙各藩之趣承繕ひ不都合無之様取計尤成丈當時京地之体情ニ付護送之向不申越所ニ取計可申候

五人衆著坂之上ハ京地ニ申入方之儀ハ速ニ可被取計候

一護送之向大坂伏見宿手等之儀ハ各藩打合在坂勘定奉行申合手當可被取計候事

一五人衆著京之上ハ

朝暮ハ御届方等之儀ハ各藩之都合取しらへ聞役申合久野四兵衛ハ可被申出候事

一五人衆著京之上ハ御怡御見廻等之儀是又聞役申合四兵衛ハ可被申出候事

一足輕頭大岡仁太夫此節護送ニ付著坂以後京地までハ案駄ニ罷越事ニ候然ニ各藩ハ護送之人數不足ニ付京地より呼向ひ候段

ハ兼而之治定ニ候然ニ此度は各藩如何之合ニ候哉矢張最前相決候通呼寄可申哉人數少ニ付自然右呼向ひ候物頭等馬上ニ罷護送いたす事ニも相至候ハ、仁太夫儀は案駄ニ罷越不都合ニ可有之候條各藩之見込打合可被申候若馬上之積ニも候ハ、右之趣京地ニ申越伏見迄仁太夫乘馬指廻方之儀可被取計候事

一各藩護送之面々を初

此方様ハ被差越候役々博多濱ハ乗船有之

通ひ船

丸頭船

一五人衆歸京ニ付左之廉々應接方より宰府ニ罷取調子

一五人衆夜具宰府ニ罷用ヒニ相成居候分箱崎泊ニ取用ヒ度趣之事

是迄之分へ取用ニ相成候由事

- 一 宰府詰各藩の箱崎付添役々之事
- 一 駕籠合羽籠類等之修覆一件
- 右は仕廻金御渡ニ相成居候ニ付御構ニ不及哉之事
- 一 隨從現人數名元之事

別紙有

- 一 箱崎御茶屋詰隨從人數之事

右同斷

- 一 各藩護送之上下人數之事

右同斷

- 一 五人衆初隨從荷物數之事

右同斷

- 一 五人衆乘馬指廻方之事

右は爰許ニ賣拂ニ可相成哉之事

乘馬之義ハ委細林才右衛門相心得居候事

但馬具共

- 一 各藩護送之荷物數之事

別紙有

覺

- 一 五人衆博多泊ニ宿手差支候付箱崎御茶屋泊ニ手當相成候事
- 但隨從も同所泊之處ニ取計候得共各藩護送之面々迄ハ同所ニ止宿不致出來候付博多泊ニ相成度候事

各藩應接方箱崎泊ニ相成度候事

但人數別紙有

- 一 船中ニ五人衆賄ハ何程之處ニ相成候哉隨從并護送之面々賄方船中之儀ニ付辨當仕廻位ニ可然哉之事

五卿滞在日記

護送之面々船中辨當仕舞位ニて不苦旨各藩方相答候事

一晝所泊り所ニ不賄之儀は是迄之通宰府賄方より引受取計候方ニ可有之哉之事

本文之通ニ多可然料理人膳部類も是迄分差廻ニ相成候管之事

但し差廻方御代官受持之事

一五人衆初隨從其外各藩護送共兩艘ニ乗組人數配り之事
但各藩護送之總人數取調之事

別紙有

一五人衆泊り所警衛各藩方差出可相成哉之事

箱崎泊所警衛ニ不及方可然旨薩申分ニ候事

○口傳有之

一宰府出立之節各藩詰方博多迄護送之役々人數等取調之事

各藩詰方人數ハ護送之向計付添余ハ宰府へ相殘候事

一五人衆宰府出立道筋休泊左之通ニ可然哉之事

小休

雜餉隈

泊

比惠村之内
新屋野立

箱崎

朝六時出立ニ付晝所手當ニ不及雜餉隈小休所ニ相成度候事

一五人衆宰府方博多迄ハ乗輿ニ可有之哉之事

乗輿ニ相成候節之駕籠其儘ニ不_レ用達可致哉取調之事

馬上ニ候へハ至_レ不_レ簡事ニ相成可申猶詮議之事

乗輿ニ相成候事

但長棒四挺御用借申上置候尤六尺五挺分御手當相成度候事



慶應三年三月
三條實美主
下秋月藩
黒田長元主
ノ音信手續
一件

一自笑庵様甲斐守御甥三條殿此節御歸京被仰出候付是迄ハ
公邊之御振合も有之御音信等之儀一切御控相成居候得共此節ハ御音信
被成度御支筋等は有之間敷哉之旨不押立秋月家老中より問合來御續書
をも差越之

覺

三條殿には自笑庵様御姉之御子ニ御甥之御續ニ御座候以上

三月朔日

一右ニ付三條殿の御音信之儀

此方様ニハ御支筋無之然ニ表立御使者等被差越候儀ハ此折柄に付御
見合被成宰府表代官迄御品御差廻御口上勤ニ相成度尤
此方様も表立御使者等不被差越同所詰之向より御進物達方取計居候

付右之趣を以自笑庵様に被仰上候様尤同所代官ハ爲心得可申入置旨
をも申入之

右之趣宰府表にも爲心得申越置候

三月

一自笑庵様此節御病氣之趣三條殿被爲聞爲御見廻使者差出度旨及引合候
付差支無有宰府詰無足頭より申越候得とも三條殿今程慎中大体使者等
被差越候儀は雙方之爲筋不可然先見合相成候様尤厚意之趣は秋月表の
可申入旨程克相答候様且三條殿隨從森寺大和守儀於秋月表朝陽院様甲斐
守長舒様御院號御妾之實家ニ付墓參致度旨申聞候由同所御家中森寺勉より相
願候付不苦哉之旨同所家老ハ申越候付何も相障候儀無之旨及返答置候
付大和守儀秋月の罷越候節宰府詰方足輕之内三人計も付添罷越候様可
被取計旨同所詰無足頭の御下知申入置候處自笑庵様御不例御伺之使者

差立候儀相止大和守墓參相束相勤候由ニテ同八日先二泊之所ニテ罷越候趣申出候段御用人宰府受持迄申越之

主上崩御ニ付
御謹慎三年
慶應三年二月
月黒田家ヨリ
コト被進品ノ

慶應三年二月十一日

一主上崩御ニ付テハ五人衆にも別テ謹慎之趣

御兩殿様御承知被遊候付御見廻として左之通被遣候付達方取計候様宰府詰無足頭迄申入之

○右御品は御用開より差廻候旨をも申入之

蒸菓子

一箱

充

博多素麵

備合 一箱

五人衆一件

慶應元年十一月

慶應元丑十一月

一宰府表より十月廿九日以宿繼

(◎虫喰)

秋月御家中芳山民之助醫師

松原波太郎醫師範同廿八日水野溪雲齋三條の附屬直出會酒肴等取寄以後龜

屋ト申宿の止宿翌朝出立いたし候由同廿八日夜三條町の差火有之候段

等申越當節から右類取締筋緩かせ有之候ハ不相濟義ニ付猶又嚴重取

計方委細可申入と遂評議候折柄森戸新五郎宰府應接頭御用有之被差越候

付十一月二日齋藤藏人ハ左之趣相舍之

含書

齋藤藏人含書
大宰府ニ立
寄人取締ノ
件

一宰府ニおゐて秋月御家中醫師芳山民之助醫師範松原波太郎十月廿八日

水野溪雲齋宿の罷越直出會酒肴等取寄以後龜屋と申候旅

(◎虫喰)

翌

朝出立後申出候段三好九内ハ申越候右ニ付秋月表ハ人柄取しらへ候様
 且以後取締向之義も申入置候一體宰府表取締方緩かせ之儀有之候ハ
 不相濟次第ニ付附屬之者共之宿手々々寺院等精々方之儀月番ハ町奉
 行の談有之候且宰府宿内宿手等取筋取計方郡奉行にも委細申談自然
 寺院且宿内等福岡表之人柄且秋月表之向ハ直出會之儀ハ別段之心得
 ニ共いたし候ハ曾ハ不相濟義ニ候勿論是迄とも福岡表之向たり共
 直出會不相成段ハ申迄も無之事ニ候右之趣ハ猶又精々申付候様申談置
 候然處郡奉行も取締方手續書取を以申出候付則相渡之候番頭はしめ
 被打合重疊勘辨之上際嚴重之道ニ取計可被申候事

一宰府三條町の差火之儀ニ付ハ猶又廻り方行届候様可取計旨番頭ハ申
 越候へとも其後も付火爲有之趣寺田嘉兵衛ハ申越此折柄度々右等之儀
 有之候ハ決ハ不相濟義ニ付猶又廻り方度々取計不審之者ハ召捕火用
 心之儀重疊入念候様可申入との

御沙汰被爲在候條一際嚴重取計之道可被申合候右之通度々出火之模様
ニハ不審之次第ニ付猶爲取締召捕方宰府ニ差越候様大目付ニ申談置
候事

一右之通之儀ニ廻り方嚴重相成候儀ハ三條はしめ附屬等不審立可申候
條前以森寺邊ニ番頭各間出會之上近比度々差火等有之候付ハ自然五
人之輩住居間近出火有之候ハ動搖も可有之右等之儀有之候ハ不相
濟次第ニ付住居外之儀ハ精々廻り方申付あやしき者ハ召捕候條住居
向はしめ火用心之儀は彼方ニ是迄申付も可有之候得とも猶又嚴重相
成候様有之度旨取締被申達置候方可然と申合候尤右之趣森寺迄申入候
段ハ四藩にも被及引合且此節取締向之儀も心得迄ニ申達置候様番頭初
可被申合候事

一兼申談懸り居候宰府表關門之儀ハ此節能き機會ニハ有之間敷哉重
疊宰府ニ可被申合候近日番頭交代之向有之候條委細ハ其節申入ニ

可有之候其心得を以可被申合候事

一宰府守衛肥後藩江口彌兵衛馬場久太郎生田又左衛門前田敬之助用向有
之博多ニ罷越候處宿屋方之案内も不召連致徘徊福岡ニ入込候付牢屋
町御番所にて差留相約候處宰府表方之鑑札致持參居候付差岡ハ無之候
條案内之者不召連旨申張候由ニ無餘儀差通候由右之通不都合之儀有
之候ハ御取締之詮も無之且宿屋ハ勿論上番初にも不都合之致取計候
付ハ以來心得方重疊相示置候條於宰府已後他藩之向此元ニ罷越候節
ハ必右體之儀無之様取計之事

○

△熊澤助左衛門宰府御守衛
無足頭宿繼を以左之廉々之趣御用人ニ申越候付承置

一宰相様方有馬中務大輔様ニ之御返書宰府在番之米藩今井新左衛門ニ

森三右衛門出會達方取計候事

一笈川平次郎御内儀去十一日御内立出候以後何方ニ參り候哉相見不申

慶應二年正
月熊澤助左
衛門報告

候事

正月十八日

正月廿三日

△熊澤助左衛門宰府御守衛無足頭を以左之廉々御用人に追々申越候付付札を以指圖

關門取建一件

一力藏御借受一條ニ付水野溪雲齋より答振御評議之上速ニ御指圖之儀申越候事

紙面之趣令承知候力藏一件ニ付溪雲齋に申向振之義は九平初に申合差越置候

一宰府表近村七ヶ所出張之足輕頭は同所に御引寄無之是迄之通遠蒔之方内外之御嚴備ニ可相成旨從肥後藩申向候事

一關門御取建一件各藩に申向候處四藩打合之上是迄之通ニ亦關門御取建三ヶ條令承知七ヶ所御人數引寄且關門取建共儀ニ

建無之候方可然旨遂評議候趣委細肥後藩に申向候事

及問數旨各藩存念之趣は專此元取調中ニ付見込之

一先達亦廉書を以各藩打合濟之御内交番之儀四藩に催促之事

趣は取受持番頭之事々相合明後廿六日差越事ニ

一米藩今井新左衛門儀須惠行之儀申入候事

候各藩交番之儀は頗ニ差急候由ニ候ハ、兼亦其元

ニ亦取建之三條初に申入廉書ニ此元見込廉々相増

鶴原九平に相合差越置候得共右見込之ヶ條は相除

且七ヶ所御人數引寄セ一條之廉はいまた評決不致

儀ニ付右廉も相除候亦各藩相揃三條初に兼亦取建

相成居御廉書を以申入方之儀宜取計可被申候其節

可被及演説ニは右廉書之外ニ少々ヶ條を以申述度

儀

一 林才右衛門宰府^馬受持^方の御内田村豊前^方菓子一箱遣候旨申出之事

正月廿二日

二ヶ條令承知候今并新左衛門須惠行之儀は可被差留候右は須惠役場ニ多は焼物類直賣相整不申候條博多に相越候様左候ハ、同所ニ多其筋之者有之候條望之品注文ニ相成候ハ、速ニ相整候付出博相成度右ニ付多は鑑札早々差出可申旨程克可被申向候

正月廿四日

一 力藏御借受一件鶴原九平堤曾右衛門に御合之趣承知仕二日市見守番等之儀は九平初三人方別紙之通申出候事

一 寺田泰次郎二日市詰に召捕方手配等之儀申談候處右手配嚴重之見込難相立候付足輕頭今一人足輕貳拾人計被差越度旨申出之事

正月廿三日

二ヶ條紙面之趣令承知候力藏一件ニ付其元手配筋之儀は委細小林頼母に申談同人今日差越候付參着之上打合宜取計可被申候

正月廿四日

本文之内ニ見ル別紙寫

覺

二日市宰府

目明貳人

右同

手傳役四人

右同

手先四人

右同

木屋所之者五人

拾五人

正月

鶴原九平等
上申書

△鶴原九平諸藩應接用辨筋兼受持高田十右衛門上ニ同堤曾右衛門上同分飛脚
を以左之廉々之趣御用人に申越候付以付札及指圖

一 九平曾右衛門儀今日宰府表に罷越掛り二日市に乘付寺田泰次郎に力

藏召捕方手配等申談候處隨從之者兩三人力藏宰所近邊致徘徊番人等

に口留メ致シ候付不寝番等仕居候趣ニ付取締筋之儀は委細泰次郎申

合置候付御人數御差越ニは及間敷旨申越候事

一 水野溪雲齋に今日對面出來不致候付明朝出會申入筈之事

一 肥後直次郎薩藩に

宰相様御逢之儀申入候處敬承仕今日出博いたし候事

正月廿三日

三ヶ條紙面之趣令承知候力藏一條ニ付多は手配

筋之儀委細小林頼母申談被差越候事

一 二日市郡牢近邊に何者歟去廿二日夜致徘徊候由

右は密々如何休之都合ニ候哉取調可被申候自然

猶又不審之次第も候ハ、ア方行届候様可被取計

候

正月廿四日

五卿附隨者
行動取締

一 日田元ア手代中分郡奉行中に以掛合筑前國太宰府ニ滞宿罷在候五人衆

に相附居候浪人共薩州を志可罷越哉も難計趣ニ別紙寫之通薩人を治

部右衛門支配所肥後國天草郡牛深村遠見番之もの迄掛合越依るは右宰

府滞留罷在候浪人共之内脱走之もの有之哉ニ被存候間右様之儀も候ハ

五卿滞在日記

ハ其次第柄巨細被申越候様内々治部右衛門申聞候旨申越掛合をも差越
來

薩人との掛合寫

一筑前滞宿五卿之人數去月四日比於同所御取扱爲有之由候處右に相附居
候浪人共薩州を志可差越哉ニも相聞得就るは天草郡内は罷渡薩州之様
子可相伺も難計御座候付早速御手を被附置被下度旨申越候由

牛深滞在

薩州

丑十二月三日

山田一介

△右ニ付郡奉行の元々手代に以掛合前文略其筋ニ而宰府表之休勢極密手
を盡途探索候處三條初附屬之者共聊相替儀も無之平穩之振合ニ相聞候
扱又薩士山田一介との書翰ニ相見候十一月四日比於宰府御取扱爲有之
と申儀も筋々取調候得共何さへ事替候儀申入候次第も無之候何分之都

合ニ候哉不審之事ニ候勿論當時は右之通平穩之都合ニ候得共此後之情
態は猶精々爲及探索相成事ニ候右牛深村滞在薩士には何れ之筋を承付
候哉右及承候手續致承知候ハ、猶又探索之次第も有之候條近比御手數
なから御取調相成度旨申越之

正月

△右之通申越置候る猶又委細爲辯解中上六郎右衛門御用所は相舍日田表
吟味役に被差越之

○

正月廿四日

△小林頼母盜賊改方手先
林頼母手先
宰府探索一
件に被差越之

△萬屋伊三郎手代喜助与申者御内は日雇ニ召仕相成居候を御詮議筋有之
候付正月廿五日盜賊改方を召捕此許に引下し溜所入之上相糺候處左之

五卿滞在日記

通申出候段大目付御用人に申出之

覺

那珂郡住吉村出生大島破り庄吉事
今程宰府社家市川清大夫家來判

溜所入

喜助

右之者相糺候處大島流罪中甘木出生龜吉柳川出生名元不分壹人右
之者共申合十八ヶ年以前破島いたし神湊の舟乗捨逃去居候已後十
ヶ年以前宰府立歸去丑五月の福岡湊町炭屋伊三郎依雇五人衆御内
小使ニ罷越左之廉々取計候趣申出候事

五人衆御内

坂本亭次郎

園女

山家驛出生

右之者宰府池端源右衛門方に召置候由

右同

いち

萩野某

園女

上座出生

まつ

右之者宰府石坂邊ニ召置候由

右同

奥田幸吉

園女

くに

右之者滿盛院借家儀平娘之由

五卿滞在日記

五卿滞在日記

九十四

丑七月比 一蒲團 壹

右は前段萩野を被相頼前段まつ方の持込候由

丑九月比 一右同 壹

右は前段亭次郎を被相頼同人園女いち方の持込候由

同月比 一右同 壹

一敷蒲團 壹

右は同御内厩辰次郎を質入被相頼宰府川口屋に歩入取計候由

丑八月比 一蒲團 壹

右同斷厩吉次を質入被相頼右同方に歩入取計候由

右之廉々喜助取計候由

五人衆

小者

繁藏

園女

はる

右は満盛院借家卯市娘之由

右同

三代吉

園女

たつ

右之者同所池端新茶屋一軒隣名元不分同方に召置候由

五人衆御内

山岡榮之進

園女

御笠郡原村

善助娘

五卿滞在日記

九十五

右之廉々見聞ニおよひ候趣申出然ニ夜具之所御郡家カ仕出ニ相成候末紛失相成候儀茂有之由ニ付自然其内之品共ニは有之間敷哉与相見込候由申出候事

一三條殿御内小者鹿藏与申者最前しけ与申女ヲ圍ひ手切いたし候後今程宰府改役助糶屋茂平方ニ召抱置候處當月九日夕ニ薩州藩中兩三人酒宴いたし右しけを初同方之女共ニ給仕爲致居候處何者とも不相知右座敷ニ石投込候間直ニ取調候得共不相知趣ニ候處茂平方ニ喜助申立候ニは右しけ差置候ニは又候混雜いたし候儀も難計趣申入候由ニ付右取調候所前段之通繁藏しけ与手を相切候得共全右之女大町邊ニ置他方之客ニ給仕等いたし候を立腹与相見繁藏所業ニ有之趣与申出候事

正月

盜賊改方

○

慶應二年二月力藏一件

△大野忠右衛門宰府詰方正月廿九日以飛脚力藏一條ニ付鶴原九平ニ相含申上置候末猶又肥後直次郎カ寺田嘉兵衛を以何分力藏御借受之儀相整不申就ニは御召寄御免被下福岡表之御計ニ御國境カ御追放ニ相成候ニは如何可有之哉之旨申聞候段嘉兵衛カ申出候答振御指圖相成候様との趣申越之

△右ニ付重疊遂評議候上紙面令承知直次郎カ申入候趣ニは何分御濟し難相成根元力藏儀一先御借受之御趣意ニ候得は是非々々御借受相成度候得共所詮不相整儀ニ候ハ、彼ニ亦兎も角も取計尤追放之儀は當節柄右体之儀有之候ニは不相濟事ニ候就ニは彼方之取計ニよつては力藏儀院内ニ御預ケ被成置候條屹度彼方ニ亦慎せ置候様自然力藏儀院外徘徊いたし候ハ、引合ニも不及直ニ召捕候右之趣は前以申達置候旨申入候方与評決いたし候其段嘉兵衛ニ被相含直次郎カ右之趣程克申入御趣意貫徹いたし候様同人カ彼ニ通達之儀取計可申旨二月朔日以付札御下知申

入之

△右之末忠右衛門より急宿繼を以左之通申越候付以付札及指圖

一力藏一件ニ付先日相伺置候末御指圖之通寺田嘉兵衛に申含直次郎に

紙面之趣委曲令承知別紙相達候力藏出牢之儀は二日市番人共の相達

申入置候處溪雲齋に別紙之通申向ニ相成候處一先引取評議之上相答

置候條彼表ニ多引合之上出牢取計可申旨溪雲齋に直次郎に相答候様

候ニは右之通被成下候ハ、誠ニ難有委細承伏仕候旨申出候段直次郎

申入方嘉兵衛に可被申談候就多は二日市足輕頭に別紙之趣等委細申

嘉兵衛に相答且又二日市牢に受取方之儀は如何相心得可申哉是又

談番人にも其段申聞彼れに引合次第出牢取計途中不都合之儀は有之

溪雲齋より直次郎に相尋候由ニ付何れ福岡表に之御指圖次第同人に

間敷候得共足輕等付添院内の連越候迄見届若不都合之儀も有之候ハ

可及通達夫迄は是迄之通相心得居候様申談置候旨をも嘉兵衛に及噂

ハ差押召捕候様可被申談候

候段申出候就多は前文之趣速ニ御指圖被成下候様且端書ニ別紙直次

一院内に連越候上は直次郎に溪雲齋に申入次第其元足輕頭等に申談

郎に申入候書面之手ニ余り候節ハ打捨ニ可被成との儀は不申入して

力藏徘徊いたし候節召捕方之手筈重疊可被申談置候且他國に忍出し

ハズリニ相成不申相見込申入置との噂之趣申越之

候儀も難計候條右之節差押方之手配等も兼多取計置可被申候

二月三日

二月四日

本文之内ニ見ル別紙寫

力藏事追放之御所置何分不容易候付牢を出し御内に引取何分仰入相
成迄之間屹度外出御差止謹慎申付相成候様其内自然外出に立出候ニ
おゐてハ見當次第召捕福岡之様連越其節社前方亂妨之始末迄も御糺

明可相成尤捕手之手ニ餘り候節は於其場打捨ニ可被成との事ニ候右
は薩州を周旋いたし漸ク穩便之御許容相成候末外方徘徊之聞得等有
之候るは申譯も無之儀故於薩州ニも見當次第御同様之心得ニ御座候
事

慶應二年正
月廿六日宰
府搜索一件

正月廿六日

一宮内十郎右衛門藤井九左衛門竹中彦太夫宰府表御取締筋爲打合被差趣
之

一豊村才右衛門宰府表の御舍之御用筋有之今朝被差越之

一宮内十郎右衛門初三人の正月廿八日宿繼を以宰府表ニ盗賊改方手先
ニ召仕候茂平与申者喜助召捕方之一條ニ同廿五日の御内の差留ニ相
成居候處同廿七日差返ニ相成候旨并薩藩肥後直次郎の御舍相成居候儀
水野溪雲齋の委細及示談候旨應接方の致通達候段申出候付委細之儀は

罷歸可申上旨申越之

一右三人の正月廿九日宿繼を以最前破島者喜助今程宰府社家判ニ相成御
内日雇ニ仕相成居候を盜賊改方ニ召捕之始末不整之都合有之候付豊
村才右衛門の御舍之趣毎事打合寺田嘉兵衛を以水野溪雲齋の右喜助与
申者大罪者ニ付召捕候處役方不馴ニ不行届之儀等有之候段程克及挨
拶候處右之都合ニ候得は尤之儀ニ付毎事相分り候間隨從之向には溪雲
齋可申解旨相答候旨嘉兵衛申出候段申越之

六月十二日

一筑後出生易者長門と申者五六ヶ年已前を宰府御社領滞在判ニ相成連歌
屋丁鐘突幸納と申者の寄宿いたし賣卜渡世程之義も無之由之處四條附
坂本禎次郎と申者と毎々酒給合其外御内の相因居候由心中難相分候へ
とも御國元之情体相通或ハ諸方文通取持等いたし居候者ニ可有之相疑

慶應二年六
月十六日易
者長門一件

ひ候者不少候旨側筒か申出之趣大目付より申出之
一右ニ付長門心中探索方之儀早々取しらへ申出候様宰府應接役の書取相
渡河村五太夫か申談之

○

一筆啓上仕候

一壬生殿小者吉兵衛と申者頃日不相見候ニ付當所其筋々の申付穿鑿仕居
申候處昨夕壬生殿役所之向か別紙之通惣詰迄申出候由當番之向より申
出候折柄又候無程惣詰の申出候ニは去ル十一日朝小使勘助与申者願出
博多の罷越候處右吉兵衛の不計行合候ニ付兎角引留居候處山笠參り込
合候内遂見失ひ候旨申出候ニ付未々自然ハ滞共は仕不申候哉乍手數早
早穿鑿之儀其筋に相頼吳候様との由是又惣詰當番か申出候就右尙又吉
兵衛取合振等取調子申候處相違も無御座勘助儀は根元博多出生之者ニ
御内の爰許より差入居候人柄之由ニ御座候且又吉兵衛義ハ下ノ關出

慶應二年六月
吉兵衛一
件

生之者之由當春之比より致狂氣今程至る胡蓋成候躰ニ相成居申候全狂
氣故ニ出奔与相見申候

一此節當表向寄ニ秋月様御人數御繰出ニ相成居候處今日吉田右近の掛合
ニ相成候ニは只今之ヶ所計リニ相集り居候ニは持場手廣之儀ニ付何分
行届申間敷相見込候ニ付最前御取計ニ相成居候御振合ニ準し三ヶ所の
鐵炮頭分配今日より差越申候左様致承知候様則人數組差出ニ相成申候
條右之一帳指上申候就るは其ヶ所々々の爲急使御代官之處を不取敢爲
相達置候得共尙又村方心得筋等委細之儀は其筋を急速達方取計候様被
仰聞度奉存候彼是申上度如斯御座候恐惶謹言

六月十四日

熊澤助左衛門

吉田 大炊様

河村五太夫様

小人吉兵衛与申者先達を狂氣罷在候處當月十一日卯半刻頃不計罷出候ニ付精々穿儀いたし候得共行衛相知れ不申候右病氣柄ニ付自然行先ニおゐて不都合之儀も難計候間御領内ニ亦見當り候ハ、其所ニ留置早々爲知候様其筋の御沙汰ニ相成候様御頼申入度候爲其別紙人相書差出申候事

六月十三日

吉 兵 衛

當寅廿八才

- 一中脊中肉
- 一眼常体丸キ方
- 一鼻常体
- 一口常体
- 一耳常体

- 一髮毛白髮交り
- 一言舌少し不廻
- 一顔色薄赤き方
- 其常体(他脱カ)

著類

- 一茶紺立縞袴
- 一紺木綿小倉帯
- 但し茶之筋糸入
- 一所持之品一切無之
- 但し無刀之事

右

六月十三日

一筆啓上仕候

一壬生殿小者吉兵衛と申者去十一日出奔仕候段は先日御懸合申上候通紙面之趣令承知差當候所ハ胡亂もの福岡表引下し候上其筋ニ多一ト
 ニ御座候然ル處五人衆小者頭之者ハ吉兵衛儀去十八日ニ御召捕ニ相成
 通取しらへ候處壬生内小もの吉兵衛と申立相違も無之候由相答置若
 福岡表ハ御引寄ニ相成候由承り何分之御都合ニ御座候哉与寺田嘉兵衛
 し引渡方之儀申向候ハ、吉兵衛儀ニ付多ハ此後於役筋取調子候次第
 手附之者迄申出候由然ルニ右手附者にも承知不仕候儀ニ付其旨申向尙
 も有之候趣ニ候條事々調子濟之上ハ道付方又ハ人柄引付方等之儀追
 取調子可申旨相答置候段嘉兵衛ハ申出候由ニ付取調子候處當所看賣去
 ヲ福岡表方之指圖次第にて打合候合ニ候旨相答置候様應接方等ハ可
 ル十九日商用ニ^(奈カ)素多浦ハ罷越居候處於濱男右吉兵衛儀ヲ召捕り福岡
 被申談置候

ハ引參居候を見請候ニ付其趣ヲ罷歸り髮結店ニ相咄候處又々髮結之

六月廿四日

者ハ右之段小者頭ハ相咄候由就右如何之心得ニ夫等之儀相咄候哉与
 問約ノ候處吉兵衛出奔之儀頻リニ心配之模様承り居候ニ付何心なく相
 咄候とのよし嘉兵衛ハ申出申候併最早相顯候處者致方も無御座然ルニ
 召捕ニ相成候段ハ相違も有御座間敷以後は何分之御詮儀相成候哉且定
 る追々右之御模様相尋ニ可有御座ニ付其節之答振等同居置度奉存候
 早々御指圖可被下候此段申上度如斯御座候恐惶謹言

六月廿三日

宰府熊澤助左衛門

吉田 大炊様

河村五太夫様

六月

五卿滞在日記

一壬生小もの吉兵衛と申者黒崎ニ差押福岡表に引下し溜所入申付候上
 取しらへ候處藝州産ニ候處拾歳之比兩親諸共下ノ關に參春米等商ひ居
 候處親共相果外ニ兄弟等も無之日雇稼いたし居候處浪人高杉晋作野村
 和作等に被召仕長州山口供いたし暇遣し候付下之關に罷歸り候途中五
 人衆筑前引移ニ付附添參候様朋輩之進ニ應し罷越壬生相成相勤居候處
 氣分不揃ニ相成看病ニ預居候内追々快相成候付不圖六月十日駈出し馬
 關之様志し罷越候處黒崎ニ被召捕候段始終之都合申出一休狂氣之趣
 ニ相聞外ニ子細も無之段大目付申出之

一右ニ付別段取しらへ筋も無之且同人義ニ付兼出奔之旨宰府表ニ被
 方々應接方へ申聞居候付右之趣申達身柄引渡可申候條窄舎ニ被相成
 番人申付之上取締方相成度委細申入引渡方及引合候様森三右衛門宰府
 爲交代七月七日罷越候付河村五太夫申談之
 一右之末於宰府番頭はしめ申合之上壬生小もの頭に委細申向候處いつと

慶應二年八
 月四日
 痛馬
 ノ件

八月四日

ても受取可申旨申聞候段大岡勘之丞に罷歸申出候付其段大目付に河村
 五太夫に相達候處右吉兵衛七月□日召越彼方に引付候段申出之

△左之通申來候付以付札宿繼ニ被指返之

一筆啓上仕候

一御内痛馬有之候付兼被請持馬醫師壹人速ニ差越ニ相成度趣惣詰當番
 紙面之趣令承知馬醫速ニ指越方御小生頭に申談置候條罷越ニ可可有
 之申出候條早々差越方御達可被遣候此段爲可申上如是御座候
 之候

八月四日

藤井九左衛門

八月

御用人

五卿滯在日記

三條四卿武藏温泉入湯一件

八月六日以付札差返之

一筆啓上仕候

一三條西殿爲御療養武藏の御入湯ニ相成度旨兼る御沙汰相成居候段ハ紙面之趣令承知別紙相達候其許評議之趣尤之次第ニ付連ニ武藏の齋

應接方ハ申上置候通ニ御座候其末彌明七日八日間御出可相成との御藤藏人被差越答ニ候處此元ニ取調子候御用も有之明後日迄ニハ出

事御座候然處武藏邊御守衛立花吉左衛門方初御人數之面々嘉摩郡大立相成兼候尤來九日ニハ出立之所ニ申合候依るハ其元見込も有之候

隈村の出張替被

通其比迄入湯延引出來候ハ、彼是都合宜候條可然様取計可被申候乍

仰付既ニ今日引越相成申候右ニ付武藏之儀は當時守衛之御人數惣拂去九日過迄之處は其元之情態ニよつてハ延引取計被兼候ハ、被申越

相成可付宰府詰馬廻頭組とも武藏の轉宿候様一昨日平右衛門迄御傳候通馬廻頭組共轉宿之儀無不都合様取計可被申候

言之趣委細承知仕候然處右入湯ニ付御守衛別紙之通ニ各藩申合相八月六日

成候處不殘同氣ニ自然急變指發候へはとても少々之御人數ニハ御引足ニ相成不申平常ニ候へは別紙之通ニ御十分之由就中薩藩杯も相答既ニ打合相濟居候由就者御合通爰許方御人數分配仕候ハ却る各藩之氣合ニも拘り可申哉ニ付武藏ニ御越相成候御備頭成丈ケ速ニ御越ニ相成候ハ、萬端御都合可然と奉存候何様三條殿入湯と右御備頭御越と込合候は、混雜仕且一体之氣合ニも拘り可申ニ付御備頭速ニ御越之御都合ニ相成候は三條殿入湯兩三日之處は申延置候都合も可有御座と彼是申合候趣不聞相伺候御評議被仰付御指圖被爲下度奉存候御指圖次第ニハ成丈ケ速ニ御指圖奉願候

此段爲可申上如斯御座候恐惶謹言

八月六日

大音平右衛門
毛利太兵衛

吉田 大炊様
久野四兵衛様

三條西殿御入湯ニ付被召連候供人數其外とも書付一
御守衛御付添先例書拔一

來ル七日八日兩日之内三條殿御入湯御供人數

- 一侍 拾人
- 一小頭以下 拾三人
- 一御召馬 壹疋
- 一御次馬 貳疋

此内壹疋ハ直ニ歸リ

人足 拾人

長持 貳棹

其外分持賄之事

御守衛御付添先例左之通

御足輕頭 壹人

上下三人

手付五人

御馬廻 貳人

上下三人充

御無足組 貳人

上下貳人充

御用辨方 壹人

上下三人

一四藩分壹人充

四人

但上下三人充

足輕二人充

△左之通申越候付以付札申入之

一筆啓上仕候

一三條西殿武藏爲入湯之明十日方被罷越候筈ニ御座候就るは付添等之儀毎時無御不都合様取計可申候右之趣藏人殿には委細御宿所の御掛合申置候儀ニ御座候猶爲御承知之申上候
一三條殿内木村琢磨病氣容体塚本道甫に爲見申度且又同宿島村左傳次

紙面之趣令承知醫師出宰之儀ハ御城代頭に相達置候間近々罷越ニ而頃日病氣ニ付同人に藥用仕度旨應接方に申出候由申來候自然道甫儀不可有之候

八月十日

支筋有之難致出宰候節は同人門弟吉田玄庵に近々罷越候様御達可被

下候先は右爲可申上如斯御座候恐惶謹言

八月九日

三好九内

吉田大炊様

河村五太夫様

慶應二年八月原某前田某召捕一件

△高井儀平儀八月四日宰府方持参いたし左之通申出候

小郡 原 何 某
厚狭市 前 田 何 某

右肥後藩小倉戰爭之節召捕糺明いたし候處五卿小倉に迎之工ミ有之候由

一當体勢ニ付兩肥米御人數急々操出しニ相成候由咄合候事

凡增人數百人計之由

但薩州ハ別段人數不指出候由

一各藩より宿内一ヶ所充受持切ニ場所割可然之咄合候事

○

八月八日大目付を差出分

從宰府以手紙得貴意候然者夜前四ツ時比當所小鳥居小路に何者歟被相切候趣聞付居申候間直様同所は走り付申候へとも最早逃去候跡ニ一圓相分り不申候然ニ連歌屋丁廻り方之御足輕三人連通り懸候處右三人切掛内壹人岡吉之助四五寸計も被相切候由同所ニ御足輕三苦岩太

慶應二年八月於宰府某被殺傷一件

郎是又通り掛候處右同斷同町富屋亭主右同斷連歌屋坊中間右同斷前文小鳥居小路町醫師玄章と申者即死其外兩三人も鞘打ニ合候者も有之右兩丁門口之柱など切付候處もヶ所ニ御座候得は諸藩之入込多くいつれ之藩之仕業ニ候哉深詮議ヲも仕候へとも一圓今朝迄相分り不申候得とも以急使此段御懸合仕候以上

八月八日

尙以御役頭へ被仰合御届可被遣候以上

聞立書

一昨七日夕四時過頃大町下市助と申者小鳥居小路下の上之方は參居候處跡を拔身ヲ引提黒き衣服今壹人ハ白手操ヲ著したる侍躰之者貳人追來候ニ付恐驚いたしなから上之方は相遁居候處右拔身ヲ引提居候者同處大福屋文右衛門と申者方店先柱に二刀切付三刀目振上なから後ニ倒候今一人ハ右市助ヲ追來余程間近く相成候ニ付持

五卿滞在日記

居候傘ヲ開後ニかさし逃行居候處既ニ傘ニ手届候得とも開き居候傘ニおとらへ兼居候内右一人の方倒伏候ニ付其内兎ヤ角相逃候同所魚屋與七と申者方ハ逃込其後は如何相成候哉不相分よしニ御座候

一同所醫師座親玄昌と申者方向小間物屋武四郎与申者方ハ右玄昌子供四五才なるヲ守之者召連遊ヒニ罷越居候處町下の方騒敷ニ掛聲等いたし候ニ付必定醉狂人と聞受候ニ付右武四郎表戸立切居候内筋向ひ酢屋新兵衛と申者方表戸ニ大なる物音いたし候ニ付表戸立切内ハ押へ居候内無程戸外ハ參り戸へ何か打付候様之物音いたし下之方ハ貳三人之足音ニお走り行掛聲相聞候内苦鋪一聲も相叫ひ其後暫ク有て人殺と申聲いたし候ニ付走出見候處向イ家玄昌倒伏被及殺害居申候よし尤此武四郎方表戸ハ血掛り居候趣ニ付一刀ハ此戸前ニお切付候よしニ御座候

一右玄昌隣家酢屋新兵衛と申者表戸ハ大なる物音いたし候ニ付有合之棒引提横合ハ走出見候處向之方魚屋與七方前ニ掛聲いたし苦敷一聲も相聞候ニ付狼藉者と呼はり居候内右與七方ハ壹人走り來候ニ付棒を構待受居候處凡十歩計亂足ニお走來倒伏候ニ付必定怪我人なるへしと存立寄見候處隣家玄昌血ニ染倒伏即死いたし居候ニ付人殺と呼はり追行ンといたし候折柄家内之者走出引留候ニ付無據立留り居候内貳人之者ハ同町上之方ハ逃去申候兎ヤ角いたす内町内之者ともハ各走來申候よしニ御座候

一同所魚屋與七方ハいまた表戸も立切居不申候處下之方騒敷段々間近く相成候ニ付家内何れも驚き裏之方ハ逃去居候處表ニ掛聲等いたし表ハ出し居候行燈ヲ切落其後は表之方靜まり居候趣ニ付暫して表ニ參リ見候處店先柱へも切付表土間ニ血落居申候よし是ハ玄昌小間物屋表ニお一刀切付られ逃行候處を此家前ニお二刀目切

付候ニ付此魚屋方の走込居候内静まりたる模様ニ付立出候處ヲ三
刀目切付られなから宿之方の十歩計逃來不凌苦痛倒伏たる趣と相
聞申候

一右玄昌のハ子供ニ守之爲付添遊びニ遣し居候折柄右騒敷候ニ付必
定酔狂人と聞受候ニ付子供之身之上氣遣し敷夫婦一同走り出候處
の彼貳人下之方より走り來候ニ付家内之者のハ何所に歟隠レ居候趣
ニ付玄昌ヲ右之始末と相聞申候

一右侍貳人玄昌ヲ及殺害上之方の逃行候節お松々と四五聲呼はり
ツ、走行候よしニ御座候

一右逃行居候處粟生慎三郎殿手付廻り方ニ參り居申候ニ上座坊門前
ニ行逢ひ岡吉之助ヲ別番代頭取方申出候通り之始末ニ御座候
一粟生慎三郎殿手付三笠岩太郎のハ其夕五人衆住居裏門當番ニ出
方いたし居候處無據用向有之止宿所の罷歸居候段は同組代頭取方

申出候通り御座候然ルニ右宿亭主富屋清次郎と申者裏門の夜具上
ケ罷越居候折柄岩太郎用向有之罷歸候趣ニ付同道いたし尤右清次
郎のハ十四五歩程引下り參居候處同人方門口ニ何者とも不知貳
人走り來岩太郎の一刀切付候處其儘倒伏候ニ付驚馳來居候處右貳
人ニ往逢清次郎ヲ突倒御社内之方の逃去申候清次郎のハ岩太郎身
之上無覺束這々馳付候内家内にも此物音聞付相宿中へも申通各飛
出清次郎一同岩太郎ヲ家内の抱入彼是介抱等いたし其後清次郎の
ハ醫師迎ひ其外療治用之品等爲買求罷越兎ヤ角心ヲ添相仕廻已後
右抱上彼是怪我人取扱候故ニ哉肩先ハ一体血ニ染居候ニ付衣服等
可改与存著類拔捨候處脊中ニ深サ壹寸計之刀突疵有之血流出居ニ
付家内とも初いづれも驚加療養候よし右は彼貳人逃懸突倒され候
節手負居候趣ニ候得ども其節迄ハ氣分張詰居候故ニ哉一向相覺不
申よし右御守衛御人數ニ心ヲ用ひ專志ヲ相立居申趣ニ相聞申候

一右之末同所上駒留メニ子供壹人腰懸居候處富屋之方ハ拔身ヲ引提候者貳人參懸り候ニ付後口御社内玉垣ニ隠レ居申候處右駒留メニ
 二刀切付三條之方ニ走り行候趣ニ御座候
 一右之外大町ハ小鳥居迄之間町家表ニ柱所々切付居候跡相見ヘ居申候

右取調ヘ候趣申上候以上

八月八日

益田勝藏
仙田文次郎

△左之通八月十日大目付ハ指出之

一筆啓上仕候然ハ昨七日夜御社領庄屋上村仁右衛門ハ別紙之通及注進候付取調候處座親玄昌儀即死其外御足輕并富屋清次郎共別紙口上書之通ニ相違無御座候尤連哥屋坊下人は極々薄手ニ御座候此段御

注進爲可申上如斯御座候恐惶謹言

八月八日

寺田嘉兵衛

大目附中

右御用狀之内ニ見ル別紙并御足輕頭取ハ之届書とも三通寫御社領分庄屋組頭ハ御注進申上候事

昨七日夜四ツ時比物騒敷御座候間開合させ候處大町若松屋九右衛門方前ニ連哥屋坊下人徳藏と申もの疵負せ夫ハ小鳥居小路座親玄昌と申者及切害居申候其外御足輕御兩人少々之手疵并連哥屋丁富屋精次郎是又同様之儀と承り合申候其外大町筋ハ小鳥居小路迄之内表口柱ニ切付居申候此段不取敢御注進申上候以上

御社領分組頭

又市

同

慶應二年八月八日

同村庄屋

上村仁右衛門

御代官

御役所

口上覺

三苦岩太郎儀昨夜御館裏御門當番ニ付致出番居候處無據用向差起り申相番へ暫時相願止宿連哥屋丁宿屋清次郎と申者方ニ御座候同人儀夜具揚之歸リニ同道休罷越居候處ニ同人方門口ニあいつ方之藩中ニ御座候哉白手繰着用兩人ニあ左之鬢口右之鬢ニ掛真上を抜打仕候様相見深手ニ御座候條早速御醫師林玄春老并當所外醫木村的哉と申者呼寄加療治申候處岩太郎儀年若之者ニあ大ニ氣解等相見の放心仕

今朝の發狂等仕大造之容躰ニ御座候且又宿主清次郎儀も手負仕居申候勿論兩人共提灯燈居申候由ニ御座候此段御届申上候以上

代頭取

八月八日

岡 要七郎

口上覺

岡吉之助儀昨夜廻り方當番ニ有之候條相宿打連前後ニ相成罷越候途中小鳥居小路上座坊門前ニあ何方之藩中ニ候哉燈居申候御紋付挑灯目掛參提灯打落左之肩ニ掛ケ抜打ニ仕闇夜之儀ニ付行方相知不申同人ハ大町松屋孫兵衛方へ走り込居申候處荒木才兵衛殿御手付小野徳右衛門与申者聞付召連御宿ニ相成候延壽王院家來坂田内藏方の届相成候條相宿打寄速ニ御醫師林玄春老并當所外醫木村的哉と申人呼寄療治仕申候格別深手ニも無御座候條相宿申合專藥用介抱等仕申候此

段御届申上候以上

御足輕代頭取

八月八日

岡 要七郎

御代官

御役所

八月

△三好九内才府詰八月十二日五人衆馬來十七日八月十四日養生候付御馬醫并林才右衛門近

々出宰之儀申越候付其段御小生頭へ相達置候條近日罷越可申旨同十四日以付札

申入之

○

八月十四日

△四條殿近來脚氣ニ付五人慶應二年八月四條卿轉宿一件之面々同宿相成候慶應二年八月四條卿轉宿一件ハ療養相成兼候條外住之

慶應二年八月四條卿轉宿一件

儀申聞候由ニ肥後藩各藩へ申向候付いづれも申合候上檢校坊の轉宿尤警衛之儀ハ一體之處肥後藩相受持

此方様の足輕兩人出番打合候旨森三右衛門の申出之

但實ハ外住之儀不相好義ニ候へ共仕切ニ肥後藩外宅之儀申立事

々引受候位ニ付御同意ニ相成候事

○

八月廿二日

一 小河伊兵衛若松詰方薩肥藩大山格之助古閑富次馬關の渡海いたし歸路

若松の一泊いたし候付右兩人の出會關地之都合相尋候處書取爲致披見

候付寫取此元の差越候段應接方の御用人の申出伊兵衛の之紙面并書取

共差出之

兩士關地ニの應接振り爲探索壹人差越置候得共いまた歸著不致候

付一兩日之内委細可申上候

五卿滞在日記

慶應二年八月廿二日小河伊兵衛探案書

一筆致啓上候

一薩肥藩大山格之助古閑富次兩人去十一日福浦に渡海之末今十四日薄暮當浦に到着直に蘆屋通り博多之様ニ通行之筈ニ候處乗船差支當所一泊明十五日其表に著之筈ニ候左様御承知可被成候右兩人に面會仕候處關地ニある之都合至る宜御座候由別紙披見候様との儀ニ付寫留差出候併差急キ寫取申候付落字等可有之御推讀可被下候万々兩士御面話可有之候得共御承知迄一應御掛合仕候十六日未明ニは歸宰之舎ニ御座候左様御承知可被下候先は右申述度如斯御座候謹言

八月十四日

伊 兵 衛

三右衛門様

勘之允様

茂兵衛様

大山格之助
古閑富次書狀

書取寫

去ル十二日於馬關軍事惣奉行谷潜藏高杉晋作之變名之由山口政府掛り前原彦太郎兩人に面會仕方今小倉表瓦解いたし候付段々御手も延可申其上先達る貴國間諜之者貳人生捕遂糺明候處倉府ヲ拔候儀は五卿方ヲ迎候爲之結構ニも可成城中丈ケは不及放火様との趣白狀いたし候由倉藩を傳聞仕候然處五卿方之儀は御熟知之通り各主命を受大切に守衛いたし居候間無味ニ可相渡様も無之就るは各藩國許より相應之人數呼寄防禦筋手當不致るは難計(叶カ)左候得は宰府中頗ル動搖ニも可及候付今般五藩申合劣生共兩人先五卿方に御逢ヲ願右之次第申述御居り之處篤斗御尋申候處全體一昨年美濃守殿を初薩州西郷吉之助吉井幸輔肥後長谷川仁右衛門筑前月形洗藏等周旋ニより皇國天朝之御爲ヲ以長州を宰府に渡海いたし候譯ニ候何そ一身之安危を計り候儀ニ無之唯今長州を條理相立不申暴ニ迎取候共動搖不致儀勿論之事ニ候段御返答ニ候此上は長州に相渡

り同藩重立候者の面會仕直与事情申通候ハ、彼も必承伏可申上候左候
 得は五藩も大きニ安心之次第ニ畢竟は近來聲息不相通 幕府ハ監察
 方御下向苛酷ニ御取締等いたし候様ニも疑念ヲ生し候處ハ左様之風説
 も起り候歟其邊之事情篤斗論度段相述候處何れも宜頼入との御事ニ付
 兩人推參いたし候譯ニ候右様無之關之暴動は萬々有之間敷候得共爲念
 一ト通申入置候儀は當時各藩五卿方御所置可成御寛典ニ候様専ら周旋
 いたし居候間監察小林甚六郎殿も右之盡力之ため既ニ不日被致登坂候
 筈ニ候漸々御運びも付候際萬一自然之儀も生し候ハ第一五卿方御身
 爲ニ不宜ニハ於貴國も怨ヲ五藩ハ請ケ三ニハ是カして天下之動搖ニ
 も至り可申一ツとして有益事ニ無之如何被存候哉相尋候處潜藏返答ニ
 は五卿方之儀御沙汰之通昨年御渡海ニハ天下之爲深尊慮も被爲在候
 儀ニ候各藩御盡力を以五藩ハ御預り大切ニ御守衛之處ハ今更存寄之儀
 素より決テ無之且又大膳父子ニおゐても兼テ國中平穩之趣意専ら懇願

致居候儀は勿論公卿方之義は右之次第ニ實ニ安心仕居候付當今之形
 勢ニ立至り候とて勢ニ乘し此方ハ迎申等之存念思も寄不申尤臣下おゐ
 ても其趣意相合聊妄動いたし候儀更ニ無之併此節之戰ニおゐては不得
 止之至情御深察被下五卿方之儀ニ付ハ以來共御疑念被下間敷何分此
 末五藩ハ御依頼申上候間御處置筋御寛典ニ出候様有御座度左候ハ向後
 種々巷説申觸或ハ隣境等ヲ惑シ人心動搖ヲ計リ候儀も不少事与相察候
 間其邊之處決テ御疑不被下様分テ頼置候間此段外御三藩ハも可然様御
 傳申吳度との趣ニ候於宰府考察いたし候ハは雲泥之相違仕實ニ一見超
 百聞決テ虚妄之儀は有之間敷候事

八月

大山 古閑

○

八月廿五日

五卿滞在日記

慶應二年八月五日
三條殿腫物ニ
湯治ノ件
好九内ヨリ
何書

五卿滞在日記

百三十二

一三條殿腫物ニ武藏湯治之儀ニ付三好九内ノ左之通御用人ノ相伺候條以付札及指圖

一筆啓上仕候

一三條殿頃日腫物有之候付武藏湯治被致度候得共滞留ニ相成候得は紙面之趣委細令承知候於此元遂評議候ニハ兼テ五人ノ面々近邊遊

萬端手込ニも相成候間來ル廿六日七日間ニ先ツ日掛ケニも同所入歩等は小林殿噂之趣も有之候得共博多詰應接方存念問合之上表立

湯被致度趣寺田嘉兵衛迄申出有之由申出候就テは早速各藩打合仕被仰立候ニは及間敷候條小林殿ニは三條殿入湯之趣一通リ申入博

儀ニ御座候得共右打合相濟候上ニも其御元ノ御伺申上候テは彼是多詰各藩ニも其段申達置候様森三右衛門ノ申談置候條於其元各藩

手延ニも相成候間不取敢爲手廻此段申上候尤御目付衆ニも博多詰打合相濟候ハ、湯治之儀可被取計候共節付添テ初之儀は先日之通

應接方を以御存念御問合之上否速ニ被仰下候様奉存候勿論各藩ニ相心得宜取計可被申候

は只今ノ應接方廻勤打合仕筈ニ御座候得共多くは違存有御座間敷八月廿五日

評議仕申候右御模様承知仕候上ニも日取等之儀は是ノ及引合相答置候様可仕候此段御伺申上度直飛脚を以如斯御座候恐惶謹言

八月廿四日 三 好 九 内

吉田 大炊様
河村 五大夫様

一筆啓上仕候

一東久世殿病氣ニ付武谷椋亭昨日出宰仕今朝容體相見廻候處服藥頼ニ紙面之趣令承知昨日入込候儀ハ不都合無之様取計椋亭ノ十日分丈之

五卿滞在日記

百三十三

東久世病
氣ノ件
左衛門上
申書一件

相成候段は椋亭の御承知可被爲成奉存候其末同内小者頭萩野泰藏と見込ニ多丸藥差遣置候由申出候條多分十日目々々位ニハ藥取ニ可相

申者明曉七ツ時を藥取ニ遣度候付往來鑑札相渡吳候様寺田嘉兵衛迄越候條付添之處ハ此度之通足輕を付添可被取計候尤立宿は博多岡崎

申向候趣同人を申出候處右は是迄先例も無御座實は一應相伺御差圖屋に必參着若同方差支候節はいつ方にも案内可致候條其段申達置可

之上遣筈ニ御座候得共何様差向候儀ニ付打合評議仕候ニは各藩と違被申候右藥取之もの福岡入込往來之儀ハ柳口北御番所に付添足輕を

ひ鑑札等は猶更難相渡乍然藥取之儀故差留候譯は勿論出來不仕右ニ及通達候様是又申談置可被申候

付無據此節之處は御足輕を爲付添遣申共ニ亦は有御座間敷哉ニ付前八月晦日

段之通り取計申候儀ニ御座候尤各藩出博之宿川端町岡崎屋に參り候

亦は不都合之儀も可有御座候間右御足輕を付添引合候節宿主を差支無御座場所の案内仕候様其筋に即刻御達可被爲下候且又右之邊ハ追追可申入候ニ付此先如何相心得可申哉早々御差圖可被爲下候様奉存候此段申上度如斯御座候恐惶謹言

宰府詰方

熊澤助左衛門

八月廿八日

吉田 大炊様

河村五大夫様

○

一筆啓上仕候

一當所御祭禮中從者之者幟竿に亂妨仕候次第は三好九内を御承知可被成奉存候其末武部諫尾与申者を寺田嘉兵衛迄申出候ニは此節之一條ニ付儀助儀福岡表に御引下シ被成候由仍直様人柄御引渡可申之處外

五卿滞在日記

百三十五

慶應二年九月朔日小者頭等亂暴一衛門上申書

ニ同氣之者等は無御座候哉取調子居候ハ御引渡方及遅々申候重疊取調子候處則小者頭長谷川仙太郎并中間三代吉虎吉勝吉右四人之者共同道ニ不_レ不法之所行仕甚以不相濟次第ニ御座候平日右等之儀等無御座候様精々申付居候得共畢竟只今之折柄ニ不_レ賞罰等嚴重不行届よりして不都合之儀ニ相至り心外之儀ニ奉存候則右之者共重疊答メ申付召込置申候前段之趣五人衆にも申出候處殊之外御氣毒心外ニ被存重疊程克及御挨拶候様被申付候旨再應及挨拶候由嘉兵衛ハ申出申候此段御承知迄申上置度如斯御座候恐惶謹言

九月朔日

熊澤助左衛門

吉田 大 炊様

河村五大夫様

猶以申上候秋月表御人數昨晦日爲交代吉田右近初致到著候旨同人ハ爲知申越候此段も御承知可被爲成候以上

慶應二年九月四日於内
山筒火通等
熊澤助左衛門
上申書

一筆啓上仕候

一薩藩之内於内山近々筒火通仕度御支筋も有御座間敷哉且又若手専ら紙面之趣令承知火通之儀ハ差間無之砲術稽古之儀ハ最早冬鳥時節ニ稽古盛り之者同所ニおゐて月々五六度充定日相立稽古打爲仕度段同相成候付内情ハ不被相好義ニ候へ共稽古筋ニ付テハ強テも御斷被成藩山田孫一郎ハ寺田嘉兵衛迄及相談候趣同人より申出申候右ニ付火兼候條月々五六度之處ハ三度位ニテ勿論定日相建必内山ニテ相催外通し丈ケは兼テ御指圖之次第も御座候付強テ催促仕候ハ、伺之上御向ニテハ砲發堅相斷張ケ間敷備無之候様程克相答可被下候
開濟之處ニテ相答候心得ニ御座候へとも稽古打之儀は御差圖ヲ相待居候處ニ答置候心得御座候條速ニ御指圖被下度奉存候

一今程東久世殿病氣ニ候處跡四人衆追々秋冷ニ赴天氣も宜御座候付近令承知登山之儀ハ差間も有之間敷候條各藩打合之上存寄も無之候ハ

近寶滿登山被致度尤表立候ハ彼是御手數ニ相成心外ニ被存候ニ付ハ登山之儀可被取計候尤忍び之所ハ彼方之都合ニ寄候儀ニ候ハ共各

誠之忍ニ被罷越度尤御各藩御打合せは可有御座歟ニ候得とも改福藩方付添等之儀ハ兎角嚴重相成度候條尙打合之上不都合無之様取計

岡表ハ被仰越ニ不相成様欠易之處ニ相濟候様重疊御周旋被下度旨可被申候

武部諫尾ハ掛合を以及頼談候旨嘉兵衛ハ申出申候右は如何相心得可

五月五日

申哉奉伺候彼是速ニ御指圖奉待候此段申上度如斯御座候恐惶謹言

九月四日

吉田 大炊様

熊澤助左衛門

慶應二年九月九日
四人衆寶滿登山ノ件

河村五太夫様

猶以申上候玉川御馬痛所ニ付爲療治杉原平兵衛儀出宰之儀申出候付則同人ハ直ニ掛合置居申候間此段御承知迄ニ申上置候以上

一筆啓上仕候

一四人衆寶滿山ハ登參之儀は先日相伺置候通勿論付添等之儀各藩打合相濟候ニ付其趣を以同内ハ申向候末明日六時發足ニ登山被致候旨寺田嘉兵衛迄申出候段同人ハ申出申候就右付添之儀は先日三條殿武藏入湯之節之通取計置申候且又小休場所等之處は嘉兵衛ハ委細申談万端御不都合之次第無御座候様是又取計置申候付此段爲御承知申上度如斯御座候恐惶謹言

九月九日

熊澤助左衛門

吉田 大炊様

五柳滯在日記

河村五大夫様

猶以申上候御馬方林齋右衛門儀幸ひ出宰仕居候付付添之儀頼談候
間付添候處ニ談置申候以上

一宰府表左之通申越候付付札を以九月十三日差返之

一筆啓上仕候

一東久世殿爲診察武谷椋亭儀節句前後ニ出宰之儀大岡勘之丞より相伺
紙面之趣令承知候椋亭儀御用筋も多く候へともいつれ繰合次第近々

候處四五日之處何分繰合出来不致候付御用相濟次第御差越可被成旨
被差越事ニ候其心得を以程克申達置可被申候

被仰聞候段勘之丞方嘉兵衛迄及掛合候ニ付其旨早速申向候處東久世
殿病體は差亦相替儀も無御座候得共椋亭儀ヲ頻リニ待兼ニ相成候付
御用被爲濟次第可成丈ケ速ニ御指越被下候様重疊頼に相成候旨嘉兵

慶應二年九月十三日
東久世殿
病氣ノ件
等

衛方申出申候

一昨十日四人衆寶滿登山每事無御不都合相濟申候右付添林齋右衛門
爲挨拶金子三百疋遣ニ相成候段申出申候且又嘉兵衛にも付添候處當
人には相應之肴遣ニ相成同人手附之者兩人に金子三百疋遣ニ相成候
段申出申候四藩付添之向には肴一折二樽相束贈ニ相成遠方は嘉兵衛
に頼ニ相成則達方取計置候段申出申候

一今十一日東久世殿爲見舞三條殿初滿盛院に出席ニ相成當所繪師席書
爲致度段相談ニ相成申候右は先日方も呼寄ニ相成候儀ニ付此節も不
相伺直ニ致出方候様達方嘉兵衛より取計候様申談置申候此段彼是申
上置度如斯御座候恐惶謹言

九月十一日

熊澤助左衛門

吉田 大炊様

大塚七左衛門様

二ヶ條令承知候

九月十三日

一 宰府表より左之通申越候付付札を以九月廿六日差返之

一 筆啓上仕候

一 御内小者力藏与申者酒狂にて不法之所行仕候付當春之比色々御手数數紙面之趣委曲令承知力藏一條之儀ハ其元見込通ニ亦外ニ存寄も無之

ニも相成候末於彼方爲相慎居候儀御座候然處昨日薩藩川畑伊右衛門候條以後之居り所は重疊申入置候様可被取計候

カ寺田嘉兵衛迄申入候ニは御内力藏最前不所行之末今程慎身申付ニ相成頃日ニ至り候ニは屹度相慎罷在其上追々余程之日數ニも相成候付差免申度同人儀ニ付ニハ初發同藩肥後直次郎聞掛之末之儀ニ付重疊程能周旋致し吳候様彼方カ任頼御相談仕候尙宜取計吳候様申入候

慶應二年九月十九日
小者力藏等ノ件

由ニ付いつれ其趣は番頭ハ申聞候末御返答之次第も可有御座候由相答置候旨嘉兵衛カ申出申候如何相答可申哉自然彼方カ之申出通御聞濟ニも相成儀ニ候ハ、以後又候聊ニ亦も不所行之次第御座候ハ、不
及引合勝手ニ執計候邊り之所を重疊申入置候方可然哉と奉存候尙御指圖奉伺候

一 當御祭禮中小使儀助と申者旗竿切候ニ付ニハ福岡ハ御引下ニ相成居

令承知儀助決罪之義其筋取調候處いまた不相約候條右約り次第申入

候其節御内之者同道仕居候者召込慎身申付居申候然ニ儀助儀何分之ニ亦可有之候其心得を以答振之儀宜取計可被申候

罪科被 仰付候哉福岡表之御所置ニ準夫々決罪申付度此儀内分及間

九月廿六日

合候旨御内小者頭より嘉兵衛手附之者迄内談候趣申出候由嘉兵衛より申出申候此儀は如何相心得可申哉奉伺候此段彼是申上度如斯御座

候恐惶謹言

九月十九日

熊澤助左衛門

吉田 大炊様

大塚七左衛門様

○

慶應二寅年十月十七日

慶應二年十月十七日長州人飯塚宿へ到着一件

一長州左之面々香春表の出張いたし居候處鴈尾越通飯塚に罷越同所關番所上番致應接候處宰府表に罷越候旨申入候由申越候旨宰府詰無足頭より取計方之儀委細申越之

桑山 八郎

光田 三郎

山本 左右助

井上 彌吉

田中 五郎

田代 滿穂

荒川 謙次

土見 又太郎

下人貳人

一就右用向之次第等問合之上差通之儀各藩打合可申ニ付夫迄之間飯塚宿に相滞らせ置候旨飯塚御代官に申越置候付宰府賄向途中警衛等之儀をも前斷一同申越候然ルニ多人數之義ニも有之如何之譯ニ亦罷越候哉假令條理相立候御用向たり共一兩輩罷越候ハ、相濟可申間各藩に其段打合申越候様尤此節すらりと入込ニ道相開ケ候ハ、此元追々多人數罷越候亦も差押へハ相成間敷左候亦ハ自然災害出來致間敷共難申候付成丈ケ相斷候様取計方各藩に重疊打合候様との趣委細寺田嘉兵衛出福いたし居候付同人に相含宰府に差越之

一就同斷飯塚を宰府迄之往來警衛は此節一兩輩罷越候義ニ付宰府詰之足
輕頭を組召連罷越候様との趣をも同人を番頭へ申合候様申談申候尤飯
塚宿ニハ爰許を足輕頭爲警衛差越同所を豊前境迄往來付添候様大頭
申談之

一宰府に罷通り候節ハ是迄之通御賄被下勿論此節ハ途中御賄を初人馬等
ハ御構無之候

一右之通御取計相成居候處別紙薩州肥後應接方を右長州人ハ及懸合候趣
等應接方を申出右懸合寫をも差越之

薩肥應接方之懸合寫

三雲藤一郎秋吉久左衛門ハ之朶雲宰府表に到着いたし候處兩人共ニ
當地に相詰居不申右ニ付劣弟共致拜見候然處御情實縷々之趣致會議
候處過月弊藩大山格之助古閑富次兩人尊藩ニ亦谷潛藏君列に御面謁
之砌御藩之御面々御出宰等必有之間敷段御咄之趣も有之且過日も前

記之兩人に御用向有之國貞御列御出宰砌も御拜謁無之右之事件ハ去
冬以來五藩會議を以他藩之拜謁等ハ一切免し不申之定約いたし申候
右ニ付守衛方之情實御賢察を以直様御歸復被下前段之賢兄方へ御引
合情實得斗御承知可被下左候ハ、速ニ御氷解ニも可相成若御不安意
ニおゐてハ御兩人御出宰ニ相成候ハ、此元之事々件々詳御辨解いた
し可申候右之ため態と急飛脚を以一ト通御報迄得貴意度如此御座候
頓首

薩肥

拾月十七日

應接方

長州先鋒

御出張所

一右之末長州之面々何れも飯塚宿を罷歸候旨應接方を申出之

○足輕頭御領境迄警衛いたし候儀をも申越之

慶應三年三月朔日
向ノ件ヨリ使者出

卯三月朔日

一長州より使者等罷越候節途中足輕頭警衛被指越其許旅宿近邊夜白廻り方いたし居候得共以來右警衛ハ被相止候付於其許も此元長州旅宿近邊態与廻り方ニ不及長人罷越候節は平常之通廻り方相成候様宰府詰無足頭御用人受持府より相達之

但長州使者警衛足輕頭は不被差越途中用辨旁之唱ニ應接方手附一兩人足輕兩三人付添候處ニ此節寺内暢三(伯カ)申向相成居候付其心得ニ亦長州醫師竹田祐泊末宰府表ハ相滞居候付暢三ハ委細申聞候趣も有之往來物頭等は不差出用辨旁前以輕輩之者差出候趣は加藤三郎左衛門出立之節應接方より祐伯伯カ申聞置候様申談勿論宿手賄を初人馬等は是迄之通御取扱相成候付大頭伯カも申合置候様宰府表ハ本文一同飛脚を以相達之

慶應三年五月八日
向ノ件ヨリ使者出

慶應三年五月八日

一五人衆伯カは是迄長州より使者を以進物等有之候付此節歸洛之節馬關ハ滞船ニ亦右報使被差立筈之處自然長州重役等出張ニ無之節ハ是非山口迄不被指立候伯カは不相濟左候得は彼是滞留ニも相成候付當所より使者被指立度旨南大伯カ一郎三條殿より大山格之助薩まで申入候趣格之助より申越候付各藩打合候處存意無之旨應接方ハ申出候付此方様伯カも御支筋有之間敷然ニ右使者被指立候付伯カハ御領内之處御足輕二人付添且御賄人夫等御渡被成候方可然与評議いたし候付御支筋も無之候ハ、早々御指圖相成度旨宰府詰無足頭より申越之

○右ニ付是迄長州より之御使者等差立候共御賄不被下處ニ御決相成居候へ共此節之使者ハ矢張是迄長州使者御取扱通ニ被仰付度尤山家宿晝休夫ハ順路飯塚宿泊小倉より渡海之由ニ付伺之通御決

置ニ相成候は筋々の御達之廉は火急之儀ニ付寺田嘉兵衛其宿々御代官の掛合毎事取計候様申談置候段も申越之

一右ニ付長州の使者之儀ニ付四藩存意無之候付於

此方様も御同意ニ付付添其外御領内御賄人夫御渡等之儀伺廉々之趣指支無之候付宜取計候様宰府受持御用人より及指圖

三條殿内使者

森 寺 大 和

東久世殿内同

渡 邊 左 衛 門

一長州より爲御使者時田少助と申者上下七人ニ而博多に到着御使者勤相濟候上ハ一兩日中ニ宰府に罷越候旨手筋を申出候右ニ付各藩打合之上五人衆謁等之儀は宜取計候様同所詰無足頭の御用人宰府受持より相達之

○右長防の使者取扱之儀は此度より以來諸家様御使者同様之御取

扱ニ相成博多逗留中而已御賄被下其外ハ御構無之人馬并旅飯等自分仕廻之處ニ相成勿論私用ニ而入込候向は一切御構無之候付爲心得筋々の申談置候様本文一同林才右衛門同所に被差越同人に相含被指越之

長州より之五人衆に左之品付之通進物相成候旨九内を申出之

羽二重 壹疋充

菓子 壹箱充

大 鯛 二

白木樽 二

こも包樽 一

張切鹽鯛 拾五六枚

紙 包 壹ッ充

○

慶應三年十月
州使下長
往復ノ件ニ
ツキテ諸藩
交渉願末

十月

一 宰府應接方々左之通申越之
一 十月九日左之各藩面々集會仕候事

薩藩

川端伊右衛門
寺田清右衛門
山田孫一郎

肥後藩

山田巳右衛門

佐賀藩

愛野忠四郎
前山新左衛門
松林源藏

米藩

津田廉平
梶村俊八
末原敬太

此方より申向候ハ

一 五人衆の長防々自然使節指越度段申入候儀御座候節ハ如何相心得答等
も仕可申哉御評議希段相談仕候處薩藩川端申出候ハ右は定る御安否相
伺候爲歟又は無據儀ニ申入候節ハ逢ニ相成候も何さへ差支申間敷
旨之申分ニ候事

一 兩肥米三藩ニハ五人衆御寛典之御所置專御周旋之折柄ニ候得ハ面會
有之候ハ御身上之爲ニ相成申間敷ニ付運相立候迄差控ニ相成候様精
精申入候儀可然由申分ニ候事

一 薩藩吉田申出候ニは先日來五藩申合ニハ大山格之助儀馬關に渡海いた

し候儀も有之候末彼方申入候儀相斷候もハ相濟不申長防より右等之儀申立候ハ、此方申入候儀ハ相斷候もハ如何ニも條理相立不申候由申分ニ候事

一同藩山田孫一郎尊ニハ敵味方陣中使節往返仕候儀古來より使節候得ハ長防申使節之儀聊被苦間敷与之申分ニ候事

一肥後藩初ハ右之儀何分唯今即答出來仕不申何れ詰方之同藩得与咄合候も返答仕可申由申分ニ候事

一薩藩ニハ外ニ存念無之大山格之助にも唯今程歸國中候得共同人も矢張同様之儀故右之處ニ承知仕候様尊仕候事

一肥後藩山田申分ニハ先達同藩古閑富次与内々咄合仕候節右等之儀相咄相斷候も夫ニ越候も無余儀次第柄有之節ハ何分不得止事儀ニ付小林殿對面之節同様五藩申付添面會ニ相成候も可宜哉与咄候儀も御座候得共是ハ誠ニ内話之儀故表立申出候儀ニハ無御座候富次儀も折節

歸國中故旁以詰込之同藩得可申合尊仕候事

一川端申分古閑氏ハ小倉にも出役ニ相成御周旋等有之居候儀ニ付事々情實御分ニ相成居候段尊仕候事

一吉田申分ニハ唯今之折柄使節等參候儀決有之間敷相咄候事
右之通ニハ相決不申尤薩藩ハ大山仁助与申者馬關ハ渡海仕候儀ニ

付用向御座候由先ニ引拂候事

一薩藩引拂後三藩相殘色々咄等仕候節肥後藩山田已右衛門申出候ニハ薩藩山田陣中使節往返之說何分難取用五人衆ハ朝幕申御預人ニ御座候得ハ右ニハ事柄相違仕儀御座候乍併押申候得ハ論判ニ相成候ニ付存念も不申出見合置候由申分ニ候事

一同十二日前段之儀如何咄合ニ相成候哉三藩問合候處可相成丈ヶ斷候處ニ評議仕候由相答候事

但本文之通五人衆身上之爲不被宜趣を以相斷候も右ニ越候も條理

相立無據申入有之節ハ小林殿御逢之節同様五藩付添立合候ニ逢ニ相成可然評議之旨噂仕候事

一薩藩ハ逢無之處ニハ不承知ニ色々申立も御座候得共前條但書之通申入候處其儀ニ候ハ、同藩ニも同意仕候由申分ニ御座候事

○

慶應三年正月十日

慶應三年正月十日
松崎子一件

一松崎子正月十五日有之候付ハ旅人取締筋當時勢ニ付猶又嚴敷遂吟味候付宰府守衛之各藩出博等致し候節諸人群集之折柄ニ付役筋ニハ右等之見分ケも出來兼不行届之儀出來可致哉も難計候付十四日十五日ハ諸藩出博等不致様右之趣を以差留方取計候様宰府受持御用人ハ三好九内迄同所詰無足頭相達置之

○

慶應三年四月四日

慶應三年四月四日
薩州コリ挨拶一件

一薩州在番中よりは迄五人衆滞在ニ付永々預世話候挨拶として左之通相贈候付挨拶之儀は大山格之助ハ出會之節程克申達候様宰府詰無足頭迄申入之

○右ニ付嘉兵衛も贈物之挨拶として格之助旅宿ハ罷越候方可然と申合候付同人ハ申談候様との儀も申入之

金子 千疋

琉球反物 二反

寺田嘉兵衛

金子 百兩

宿手爲挨拶 連歌屋

○

卯四月

一先日ハ宰府御内と唱五六人騎馬ニハ原田驛通行ニ付代官ハ姓名爲相尋

五卿滞在日記

慶應三年四月
五人衆并
家來無斷遠
乘ノ件

候處不相名乘罷通歸路同所ニ晝仕廻ニ付尙又取約メ候へ共同様不申聞一體御内之向他行之節ハ足輕等ハ付添居候へ共其儀も無之如何之都合ニ候哉以來之締筋ニも相拘り候付心得方且其節之取計振原田御代官ハ寺田嘉兵衛迄申越候右ハ公家衆不意遠馬ニあいつ方にも申向無之由ニ亦甚以不都合之段宰府詰方歸り三好九内無足頭ハ申出之

一西三條東久世壬生四條申合ニよつて去十七日不意ニ箱崎ハ出馬有之右出馬後惣詰ハ相届福岡表ハ懸合之間合無之旨宰府詰加藤三郎左衛門ヨリ同役迄申越候段御用人へ申出之

一右之通度々不意之遠馬有之候ハ懸リ在役を初其外之向にも殊之外難澁之儀も有之且ハ自由ニ徘徊有之候ハ兼々被仰入候御國法も不相立役人共も其節之都合ニ寄候ハ身柄ニも相拘候儀可有之いつ方と申候亦も夫々之役前有之候段ハ申迄も無御座候條重疊組取相成以來ハ出馬等之儀必前以通達相成懸り役之承知之上他行有之度勿論出馬等之儀御

打出有之候共決テ差留メ申儀ニハ無之國法且ハ役筋身上ヲも屹度被相察候亦他行之儀前廉御談之儀有之度候旨出府宰府應接請持小河伊兵衛爲詰方四月十九日罷越候付右之趣御用人ハ委細相合申入方宜取計候様申談之

○

慶應三年五月

慶應三年五月
五卿衆遠
乗ノ件等

一五人衆并御内ニ至迄近村乘廻等ニハ間道徘徊等有之其外樂事等致し候とも毎事於福岡御聞届相濟居候處ニ御居置相成度旨石松左司馬ハ左之通申出之

一五人衆并御内ニ至迄爲保養近村乘廻等ニハ間道徘徊等有之時ニよ郡奉行書面之趣承届候申出之通近來猥ニ徘徊いたし候付御國法之儀つてハ兎狩杯催ニ相成儀も御座候然ルニ御關番所前通行に付亦ハ

委細爲申入候處事々致承知候右付前以乘廻等之儀相分り候節ハ其筋

御嚴法御立ニも相成居申候得共現業不被行事のミニ御座候上毎々
は寺田嘉兵衛より申入事ニ候尤不意乗廻等之節ハ宰府惣詰印鑑を以

御模様替ニ相成候付色々心配仕事計ニ御座候條以後ハ五人衆并御
往來いたす管ニ候共節ハ右印鑑改番所ハ差出請取置歸路之節相渡候

内之者共間道徘徊其外樂事等いたし候とも毎事於福岡御聞届相濟
所ニ相決候右ニ付合鑑ハ嘉兵衛方筋々ハ差廻置事候共心得罷在候様

居候處ニ御居置度奉存候此段御評議被爲下度候事
可被申談候

五月

石松左司馬

五月

○

慶應三年六月十五日

一宰府表方左之通申來之

慶應三年六月十五日
土州人歸國一

一隨從土州藩武部諫尾平川和三郎儀容堂様御不例ニ亦京都表方御下國
ニ相成候趣承知いたし就ハ右御容體爲伺之一先歸國いたし度趣五
人衆に申出候處則聞置ニ相成候由其末薩藩大山格之助まで右之趣申
入候よしニ亦大岡勘之丞迄申向候ニ付四藩打合候處何れも存違無御
座候趣相答申候旨申出候然ニ四藩存違等も無御座儀ニ付此方様御一
藩ニ亦御指留と申儀も難取計左候は却亦御不都合ニ亦ハ有御座間敷
哉と評議仕候間御支筋無之旨相答置申候尤御領内付添等ハ例之通大
頭に申談置儀御座候

六月十五日

加藤三郎左衛門

宰府受持

御用人中

尙以諫尾和三郎出立日限等は駈と相分不申候由ニ候得とも兩三日
之内ニは出立可致哉と相考申儀ニ御座候

五卿滞在日記

慶應三年六月十八日合鑑變更ノ件

六月十八日
宰府表に左之通申入之

一去十一日御内長村縫殿儀日懸ケにて出博之節印鑑寫之通之分を以致
通行是迄之印鑑とハ致相違御門々々ニ亦も大ニ疑惑致し候條以後出
博之節は是迄之通之印鑑を以往來いたし候様有之度旨手筋より申出
候右縫殿持參之合鑑は近來其元ニ亦相究候近邊不意罷越候節之合鑑
ニ亦ハ有之間敷哉と被考候右はいつ方にも相用ひ候儀ニ亦は無之候
條重疊其心得可有之候猶渡し方之節之振合取調子可被申候右ニ付以
來出博之節は是迄之往來通ニ取計候右之趣懸り之向にも精々可被申
談置候

宰府受持

六月十八日

御用人中

慶應三年六月廿六日薩州入費取換ノ件

慶應三年六月廿六日

加藤三郎左衛門殿

一大山格之助薩州より宰府詰應接方迄申向候趣は此節御國許に申遣置
候得共差越方隙取候間當時左之通御取替相成度旨申聞候段同所より申
越候付重疊評議之上申掛ケ通御取替相成候事

金千五百兩

慶應三年六月五人衆鐵砲打ノ件

慶應三年六月

一五人衆鐵砲打方場所内山村之内ニ亦定日相極り候趣彼方寺田嘉兵衛
迄及噂候付餘り烈敷様ニ相見込候付農業之儀申立定日少々相成候様申
入候得共五十定日は的前ニ亦農業妨ニ不相成様取計候旨相答候條右定
日書付御承知相成候様應接方申出候段三好九内より以飛脚及言上

五卿滞在日記

百六十三

鐵砲定日書付

朝正六ツ時カ

一 毎月二七日

定日

但雨天之節流會

同

一同 五十日

但此日申合を以的前致候節決る農業妨不相成候様可致筈

卯六月五日

慶應三年七月

慶應三年七月

一 木村琢磨土州藩七月十日暇相願同日出立之旨藤井九左衛門カ申越之

慶應三年七月十日

同年七月十日

慶應三年七月十八日清水要助ノ件ニ注

七月十八日

一 清水要助宰府詰七月十四日夕大町邊ニ用事有之罷越居候處松浦百太郎

同上ニ出會同道ニ罷越候折節盆踊リニ群集いたし右之中ニ立竝見

物之處櫛田早尾ニ隨從同立竝同人所持之團を百太郎所持之團と相心得無

何氣借用いたし候處早尾大ニ立腹いたし候付重疊相斷其末尙又小野阿

波方ニ早尾宿所ニ付阿波カ内濟之儀申入候處却ニ彼ニも相侘事々内分

ニ相濟候然ニ御場所カ各藩ニ對し不都合ニ付私用徘徊差留被申付

候様足輕頭カ申出候段七月十六日委細櫛橋久兵衛大頭カ大頭迄申越候

付其段大頭カ御用人へ申出候付遂評議此節ハ全小事之事ニ付以後心得

一 林才右衛門御馬方カ五人衆より左之通被相贈候段申出之

金子

千疋

袴料金

七百疋

筋重疊相論徘徊差免方之儀大頭へ同廿日及指圖

慶應三年七月廿四日
條卿遠馬ノ

○ 慶應三年七月廿四日

一元三條雜餉隈邊爲保養遠馬且同所御茶屋拜借之儀申出候付御支筋無之旨申入置候處頃日殘暑手強當時見合冷氣ニ至り可被罷越旨申出候右ニ付林才右衛門ハ歸福申談御茶屋にも延引相成候段申越置候旨加藤三郎左衛門同所詰以飛脚及言上

慶應三年八月
月吉田清右
衛門死去一

○ 慶應三年八月

一吉田清右衛門薩州藩宰府表おゐて八月十八日死去之旨寺田嘉兵衛より申越之

慶應三年八月
月十一日五
一人衆持馬ノ

○ 慶應三年八月十一日

一五人衆持馬兩足不用達ニ付

此方様の御遺物ニ被成度旨水野溪雲齋より林才右衛門御馬方迄申向候段申出候付直ニ才右衛門ハ相含歸福申談候付同人ハ御承知相成度旨藤井九左衛門御無足申越之

一右ニ付御受用可被成様無之ニ付才右衛門ハ委細申談置候付程克御斷可及旨取計候様同十二日申入之

慶應三年八月
月九月

○ 慶應三年八月

一五人衆より馬五疋此節

此方様の御預ケ被成度旨林才右衛門ハ申出候段宰府表ハ申來候付評議之上御斷難被成候付御許容被成候旨申越之

一右之末數日御預り相成居候ハ飼料彼是御出財ニも相成候付御預り御斷被成候方ニ候へとも左候ハ先方難澀之趣ニも可相成ニ付賣拂代料

ニ御戻し相成候方と申合賣拂直段取調子候處左之通ニ外ニ賣上ケも出來不致然ルニ兼引込候より中次之者方へ數日飼方いたし居候付右代金之内にて飼料も引落候筈ニ候得共左候ハ彌以代金少ニ相成候付飼料ハ
上より御價被下候所ニ受持本ノ御用人より及引合候上本文代金差廻候様林才右衛門に委細申談之

覺

一鹿毛

代金貳拾三兩貳步

一黒栗毛

代金貳拾貳兩

一青毛かぶり

代金八兩貳步

一青毛

代金六兩

正金六拾兩

九月十日

○ 慶應三年九月

一水野溪雲齋從者三島榮之助事溪雲齋を暇遣し候由ニ九月四日出奔いたし候旨小野阿波を申出候段延壽王院より申出之

○ 慶應三年九月

一御内左之面々九月廿六日出博之上鐵砲師に注文いたし度品柄御座候間立宿岡崎屋喜平博多宅に爲呼寄出會いたし度旨申出候段加藤三郎左衛門

五卿滞在日記

慶應三年九月四日三島榮之助出奔一件

慶應三年九月渡邊左衛門鐵砲注文一件

門無足頭府詰方申來候旨無足頭方申出之
 一右ニ付鐵砲師に申聞其筋之者付添出會爲致候様杉山文左衛門御用御用に御用人より申談之

御内

渡邊左衛門
 今井平三
 藤田主水

○

寺田嘉兵衛方申出之

一十月八日薩藩伊東矢八郎大早ニあ八ツ時比著宰仕候森寺大和守直ニ薩藩宿に出浮南大一郎も出浮申暫咄合左之面々同道ニあ住居所に出方溪雲齋も出方夕五ツ時比引拂大野屋十三郎与申者方ニあ打寄咄合いたし候事

慶應三年十月八日薩藩士等密會ノ件

住居所に出浮候名元

中村矢之助
 伊東矢八郎
 大野屋方ニあ打寄候名元
 中村矢之助
 伊東矢八郎
 加納藤左衛門
 家村幸之允

一著込候る咄合仕候節は中村伊東森寺南四人密談其外は一座不仕候由之事

一伊東儀同九日夜白ニあ小倉迄之先觸出し四ツ時比宰府出立來十五六日比ニは歸宰仕候由之事

一薩藩宿亭に開立之儀談申候處兼あは色々之咄も仕居申候得とも近來は

何事も右等之咄不被仕由申出候得共尙又心を寄候る探索いたし候様談置申候事

- 一 當月三日ニ大山格之助國元出船上坂仕候由右船は大坂の廻し相成候蒸氣船荷積いたし居候折柄ニ外ニ蒸氣居合不申ニ付右船ニ乗大坂著之上同所の參り居申蒸氣ニ乗替候る十五日比ニは必博多の廻著仕候由尤大坂ニ薩州御家老申合せ五人衆運之儀尙又取組筈之由ニ候事
- 一 大山著仕候迄は一體不馴ニ有之外藩与違ひ御間柄之儀ニ付事々宜敷相頼候由中村矢之助の相咄候由之事

○

若松在住の之注進狀寫

- 一 三田尻ニ風説諸隊之者三千人乗船手當ニ相成船賃銀壹艘ニ付兵庫まで三拾五兩ニ借上ケニ相成且武器其外諸道具ハ異船形三艘に積入ニ相成候由ニ貳艘同所の繫船仕乗士之處ハ不相分由若殿様九月廿五六

慶應三年九月十日
風説書 松崎精平

日比宮市三田尻兩所間へ御出張ニ諸隊之向に何御用歟御達ニ相成との風説專ニ世間騒敷相見候由

- 一 九月廿六日大坂出帆之船入津右噂ニは薩藩京都詰交代之由ニ下坂候處折節薩州蒸氣船壹艘入津三百人計乗組居候得共交代之模様不相見候由

一 久留米藩交代相濟下坂近々歸國之噂ニ付東海船も相待居候處少々ハ御下りニ相成候へとも残りハ御下國之模様寸度不相分何と歟騒敷噂仕申候

右之通今朝より風説承候付御注進申上候以上

十月二日

松崎精平

○

- 一 筆啓上仕候
- 一 三條殿頃日少々不快之由唯今之内ニ藥用被致度就るは遠路近比申兼

五卿滞在日記

百七十三

慶應三年十月十日
不愉快ニシキ
遺ノ谷ノ件 差

紙面之趣令承知候様、享指越義ニ候處同人ハ大病ニ多トモ出宰ハ候得共早々醫師見舞ニ相成吳候様尤武谷椋亭儀は兼テ診察等もいた難出來候就テハ外ニ指向ケ候人柄も無之候條御番醫中村見泰被指越

し居候間同人出宰出來いたし候ハ、大ニ都合宜趣應接方迄申入候由事ニ候出宰之上貴殿并應接方間ハ及引合候條診察之儀ハ宜取計可被

申出申候御支無御座候ハ、速ニ出宰いたし候様被仰談可被下候此段申候自然醫師西洋家之向望も有之候ハ、被申越次第尙評議之品も可

爲可申上如斯御座候恐惶謹言

有之候條此段ハ爲心得申入候

十月廿日

熊澤助左衛門

十月廿二日

黒田諸左衛門様

小河傳右衛門様

慶應三年十月五日等無斷犯制一件

慶應三年十月

一愛宕下武次郎ハ去ル十二日士體之者四人連ニテ宅ハ立寄晝飯所望ニ付酒肴差出候處六本松通太宰府方角ハ案内之者世話いたし吳候様尤右之路筋ニ御番所無之哉与尋ニ付壹ヶ所有之候旨答申候處其外ニ不通路は無之哉又々尋ニ付外ニ道ハ一向存居不申旨相答候處左候ハ、最早案内之者差出不及旨ニテ酒肴代算用有之直ニ東方角ハ被相越且又同十四日姪濱村西島清三与申者宅ハも同様四人連ニテ罷越晝飯所望ニ付酒肴飯差出候趣夫々申出候扱又近來宰府近邊并觀世音村抱之内共折々鐵炮火音相聞候付村中之者申合吟味致し候處士體之者砲發致し居候を見當候付姓名等相尋候得ハ立腹之上強テ相糺候ハ、手荒之儀も可有之村方之者共是非相糺候儀出來兼候趣同所庄屋并組頭共より以書付申出候段郡奉行より申出候付取調子候上森三右衛門宰接府宰府表ハ差越候付左之

含書相渡宜取計候様御用人の相達之

含書

一十月十二日東久世同十四日壬生愛宕參詣壬生ハ姪濱井桁屋清五郎方立寄候趣相達候付取調子候處間道往來之旨相達候其節之都合ハ委細別紙ニ相見候通ニ候然ニ根元間道往來且宰府ハ不意遠馬有之候ハ懸り役々を初難澀筋指發り御國法も不相立役前之身廻リニも相拘り候付其邊りハ巨細承知之上御國法通り取計相成度旨は兼々も申入相成居候通ニ候右之末此度自己之振舞有之候ハ掛り々々役前之者ハ甚以不相濟次第ニ何分此先之取ル筋も不相立當或罷在就ハ向後取締方を初嚴密取計事ニ候依之先其節之趣次第ニは差押へ不都合之筋相起り候共會ハ御頓著不被成候右之趣委細申入一統之心得方緩かせ無之様論方申入之事

一宰府向寄ニハ砲發一條ニ付水野溪雲齋初迄委細申入返答之趣逐一

令承知候然處村方ニハも遂吟味砲發之向差押へ方手ニ不及村々ニハも別ハ難澀之段委細別紙之通申出候條取締方精々行届不都合筋無之様尙又打合之事

○右含書之内ニ見候別紙は宰府掛合ニ綴込略ハ不記之

慶應三年十一月十四日

一小河助左衛門應接方より左之面々より御國製之由ニハ上茶進物有之候

付爲答禮左之品遣度御仕渡之儀相願候付宰府受持御用人聞置ニ相成

久留米藩應接役宰府詰

谷田 彌市 太

梶 村 俊 八

松 魚

一連充

慶應三年十一月十四日
上ノ件
米藩士茶進

慶應三年十一月十八日
一力藏死件去一

慶應三年十一月十八日

一三好九内宰府詰無足頭詰より左之通申來候付以付札十一月十九日差返之

一筆啓上仕候

一四條殿内力藏病氣養生不相叶一昨十六日夕致死去候付當所禪宗光明

紙面之趣令承知結縁之儀ハ御城代頭ハ相達置候條其心得可有之候以

寺爲致結縁度段申出候右ニ付結縁無指支道々手筋ハ相達候様御達可

上

被下候此段爲可申上如斯御座候恐惶謹言

十一月十九日

十一月十八日

尙以本文之通病死之唱にて御座候得其實は別紙肥塚權之丞連名ニ
亦申上候手疵之末一昨夕致死去候趣ニ相聞申候且又相手志木芳太

郎儀一昨十六日夕致脱走候趣申出候此段も爲御承知申上置候以上

○

卯十二月

一兼ハ合居候者より左之通申出之

一薩長ハ京地ニハ

御所より何と歟被 仰出候儀御座候筈之由當月初ニハ是非被 仰出

候ニ付京地ハ長州迄日數三日ニ右之左右相達夫ハ當所ハ申越ニ相成

右一左右次第速ニ發ニ相成候由内々ニハ咄居候由之事

一長ハ筋ハ唯今人數千五百人上京いたし居申國々二千人手當京都ニハ何

とも被 仰出無御座又被 仰出有之候ハも不承知之儀ニ候得は急々

登せニ相成候由何と歟不被容易事ニ可至歟之旨内々ニハ咄いたし居

候由之事

一南大一郎先日ハ長州ハ參候節長人一向取合仕不申甚不都合ニ有之候

慶應三年十一月
二月薩長ハ
密勅一件